

富山県高岡市

頭川城ヶ平横穴墓群

第Ⅱ次発掘調査報告



1984年3月

高岡市教育委員会

発刊にあたって

近年、日本海側地方の古代に、歴史上文化上の関心が高まっています。越中では、現在の高岡市伏木にあったとされる国府に、国司として赴任した大伴家持によって、数多くの歌が詠されました。それらに接するにつけて、往時の面影を今に伝える風土とあいまって、越の地に万葉の文化が育まれていたことに、想いが寄せられます。

さて、頭川城ヶ平横穴墓群は、縄文・弥生の時代を経て、古墳時代の跡り、いよいよ奈良時代を迎えるとする頃この地に集落を営み生産に励んでいた人々が、安らかに永眠する墓地でした。その後まもなく、当地に東大寺豊田地領加庄が開けていたことを思うと、越中の国土造りにいそしんだ人々であったと偲ばれます。

当横穴墓群が、地域開発に遇うことによって、偶然にも調査の機会を得て、貴重な成果をあげ本報告書が刊行されること、意義の深いことと言わなければなりません。

調査に際し、高岡市細池光徳寺住職安居堯雄氏・日本海頭川鉱山山口吉次氏を始め、地元の皆様・関係各位の御理解と御協力を賜りました。ここに、紙面を拝借し感謝申し上げます。

昭和59年3月

高岡市教育委員会

例　　言

1. 本書は、日本海頭川鉱山の土砂採掘に伴う富山県高岡市頭川城ヶ平横穴墓群の第2次発掘調査報告書である。調査は、昭和58年7月4日から同年12月16日まで実施した。調査対象面積は6,500m²で、そのうち発掘面積は、本調査と確認試掘併せて計840m²である。
2. 調査は、昭和58年度国庫補助金・県費補助金の交付を受けて、高岡市教育委員会が実施した。また、調査にあたっては、富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けた。
3. 調査事務局は、高岡市教育委員会社会教育課に置き、文化係長太田健一・主事大野文郎・同逸見護が調査事務を担当し、社会教育課長島田富士弥が統括した。文化庁記念物課・富山県教育委員会文化課の指導を受けた。
4. 調査参加者（調査指導）富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事酒井重洋・同橋本正春（調査担当）高岡市教育委員会社会教育課主事大野文郎・同逸見護（調査補助）富山考古学会会員柴一良・同田畠健二（発掘作業）山口七三郎・加納徳平・内山安太郎・神田秀雄・五十田周光・島秀夫・山口すけ・加納さみ子・竹内はな・東よし・萩原悦子・山田ちり子・岡野道子・中谷和子・山下時子・大野一成・片境夢男・坂田悦康・長崎浩司・樋口謙一（遺物整理）八塚綾乃・柴代子・守護晴津子他（写真撮影）広瀬涉
5. 本書に掲載した遺物遺構実測図は、柴・田畠両氏の協力を得て、酒井・大野・逸見が作成した。写真撮影は、遺構を橋本・酒井・広瀬氏が行ない、遺物及び人骨を広瀬氏が行なった。
6. 人骨は、富山医科薬科大学医学部松田健史教授・森沢佐藤助教授に鑑定していただき、玉稿を賜った。獸骨等は金子浩昌氏（早稲田大学）に鑑定していただいた。
7. 調査に際しては、次の各氏に貴重な助言をいただいた。ここに感謝する次第です。
小島俊彰氏（金沢美術工芸大学）、西井龍儀氏（富山考古学会）、秋山進午氏・和田晴吾氏（富山大学考古学研究室）
8. 本書の編集・執筆は、富山県埋蔵文化財センター職員の助言・協力を得て、酒井・大野・逸見が分担して行ない各々の責は文末に記した。

目 次

発刊にあたって

例 言

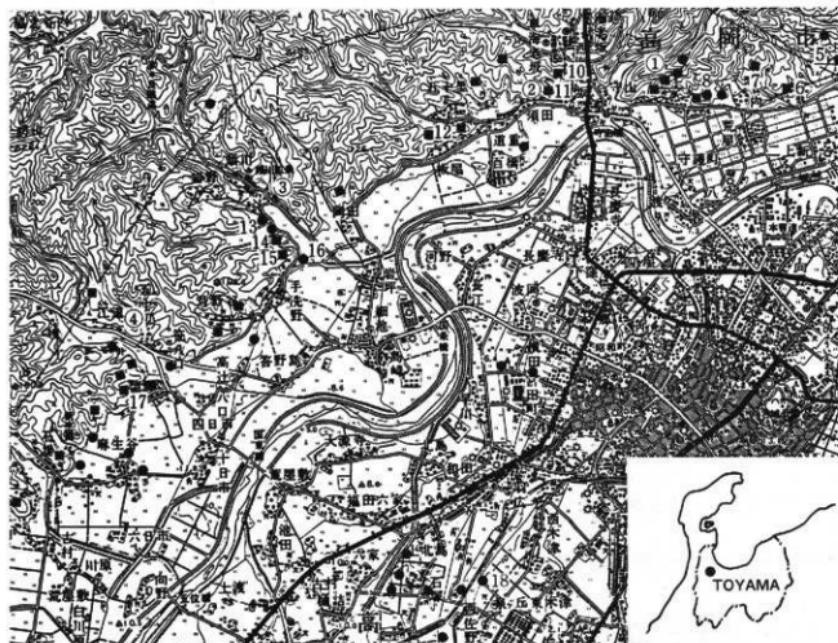
I 地形と周辺の遺跡	1
第1図 地形と周辺の遺跡	1
第2図 頭川遺跡出土遺物実測図	2
II 調査の経緯	3
1. 調査に至るまで	3
2. 第1次調査	3
3. 第2次調査	3
第3図 遺跡地形図	3
III 調査の概要	4
1. 周辺部の確認調査	4
第4図 頭川城ヶ平横穴墓群発掘区及び概略配置図	5
2. 第5号横穴墓	7
3. 第15号横穴墓	7
第5図 第15号横穴墓出土遺物実測図	8
第6図 第5号・第15号横穴墓実測図・出土釘実測図	9
4. 第14号横穴墓	10
第7図 第14号横穴墓実測図・出土釘実測図	11
5. 第16号横穴墓	12
第8図 第1次調査出土の須恵器実測図	12
6. 第17号横穴墓	12
第9図 第16号・第17号横穴墓実測図	13
第10図 第17号横穴墓出土の人小動物骨実測図	14
IV 調査の成果	15
1. 埋葬について	15
2. 鉄釘について	15
表1 横穴墓内出土釘計測表	15
第11図 釘分布図	15
3. 横穴墓の年代について	16
第12図 横穴墓形態図	16
第13図 横穴墓の時期	16
4. 横穴墓の形態・分布について	17
5. 周辺の横穴墓群について	17
引用・参考文献	18
6. 頭川城ヶ平横穴墓群出土の人骨について	19
第14図 第5号横穴墓玄室内人骨分布図	19
第15図 第15号横穴墓玄室内人骨分布図	22
第16図 第14号横穴墓玄室内人骨分布図	24
第17図 第16号・第17号横穴墓玄室内人骨分布図	27
引用・参考文献	31
V まとめ	32
写真図版	

I. 地形と周辺の遺跡

富山県西部に、宝達山系から二上山に連なる丘陵と、飛驒山系に源を発する庄川の扇状地がある。この山裾と扇状地の微高地の間を、小矢部川が蛇行して富山湾に注ぐ。この丘陵一帯の山裾には、桜町横穴墓群、田川横穴墓群、城ヶ平（馬場・赤丸）横穴墓群、江道横穴墓群、頭川城ヶ平横穴墓群、金光院裏横穴墓群等の存在が知られている。この丘陵の尾根上一帯にも、柴野古墳群、ドウガヤチ古墳群、四十九古墳群、安居山古墳群、タチ山古墳群、大寺古墳群I・II、板屋古墳群A・B・C、西海老板古墳群、東海老板ムカイ山古墳群、城光寺古墳群の名で知られている古墳群が在る。これら後期古墳群と前記横穴墓群の分布はほぼ一致している。また、高岡市に位置する西山丘陵と通称される山間地に利賀野遺跡がある。さらに西方2kmに、北陸地方の縄文晩期の示準遺跡である勝木原遺跡がある。この西山丘陵一帯は遺跡の密集地となっている。

また、庄川扇状地の微高地は遺跡の多い地である。石塚屋敷田遺跡、石名瀬A・B遺跡、石塚江之戸遺跡、石塚五俵田遺跡、石塚蛸保遺跡、寺野遺跡、東・西木津遺跡、泉ヶ丘遺跡、下佐野遺跡、西佐野千代遺跡が散在し、縄文時代から古墳時代以降に至るまでの歴史がある。

頭川城ヶ平横穴墓群は、小矢部川の支流頭川が開いた頭川谷の谷口にある。谷口の両端部は標高約90mの山地で



第1図・地形と周辺の遺跡 (1/50,000) ○横穴墓 ■古墳群 ●集落跡

- | | | | | |
|---------------|------------|------------|-------------|--------------|
| 1. 二上 横穴群 | 2. 頃田 横穴群 | 3. 頭川 横穴群 | 4. 江道 横穴群 | 5. 城光寺 古墳群 |
| 6. 院内 古墳群 | 7. 鳥越 古墳群 | 8. 谷内 墳群 | 9. 二上 古墳群 | 10. 西海老板 古墳群 |
| 11. 頃田不動山 古墳群 | 12. 板屋 古墳群 | 13. 頭川 古墓跡 | 14. 安居山 古墳群 | 15. 四十九 古墳群 |
| 16. 頃川 遺跡 | 17. 柴野 古墳群 | 18. 石塚 遺跡 | | |

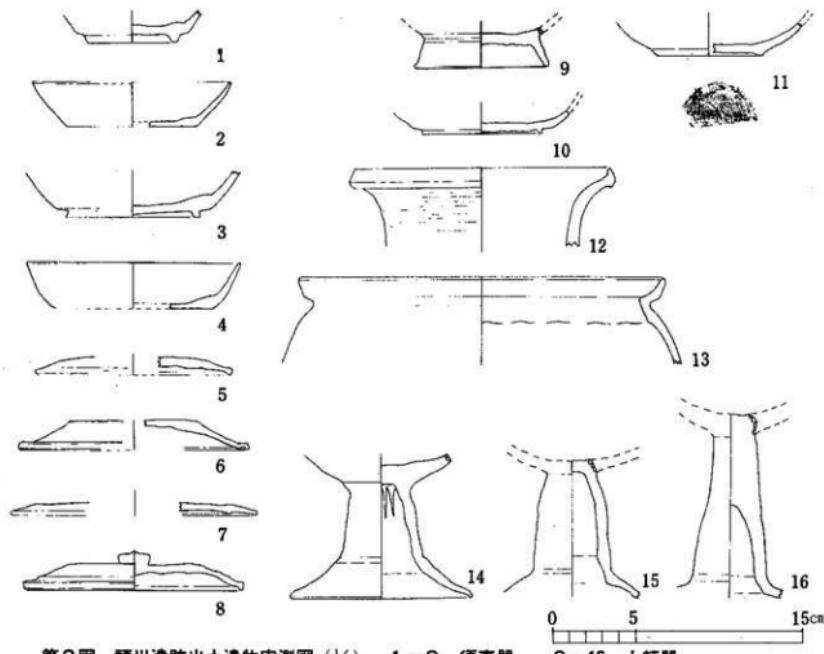
ある。谷口の北東側山地の南西斜面に同様穴墓群がある。南西側山地の尾根上には、安居山古墳群、四十九古墳群があり、その北に標高40mの台地がある。ここは現在頭川地区的墓地となっており、その崖の切り通し断面から、火葬骨と土葬骨が出土している。また、この谷間は平均標高15mを測り、須恵器、土師器が出土した頭川遺跡がある。現在は、ほ場整備された水田となっている。

頭川川は、津々良岬を源流とし、頭川谷を経て小矢部川に注ぐ長さ約3kmの小河川であるが、渇水期でも水音が絶えることはない。谷口から約1km北西に入ったところに現在の頭川集落がある。その北の緩斜面に頭川オスキノ原遺跡、頭川宮中遺跡がある。また、津々良岬の向こう側は水見市仏生寺であり、この地との交流の多いところである。

以上のことから、約1kmのこの開析谷は、当時も生活が営まれていたと考えられる。この様な谷は小矢部川に沿って約2~3km毎に在る。その谷々に集落単位の横穴墓群が存在し、これらの谷すじを集落単位で生活の場としていたと考えられる。また、この谷部を生活の場としていた集団と後期古墳群を造った集団、また、横穴墓群を造った集団との関係は、今後、多方面からの調査研究で解明されるであろう。

頭川周辺やその隣接地には、芋や筍、薪を貯蔵したり、昭和初期までは収穫の施設として利用した穴倉が数多く存在する。それらは横穴墓の構造と酷似していたり、横穴墓の一部を改造したと考えられる穴倉である。また、横穴墓の存在する立地環境と一致していることから、未確認の横穴墓が多数存在すると考えられる。

(大野)



第2図 頭川遺跡出土遺物実測図 (1/3) 1~8 須恵器

9~16 土師器

II. 調査の経緯

1. 調査に至るまで

昭和57年8月6日に、高岡市頭川城ヶ平1-1地内で、日本海頭川鉱山山口産業が土砂採掘中、偶然に、横穴墓の側壁を開口し、人骨と須恵器を発見した。連絡を受けた高岡市教育委員会は、富山県教育委員会及び当該土地所有者鉱区権者・土砂採掘権者と協議を重ね、調査の協力と理解をいただき、調査に着手することになった。

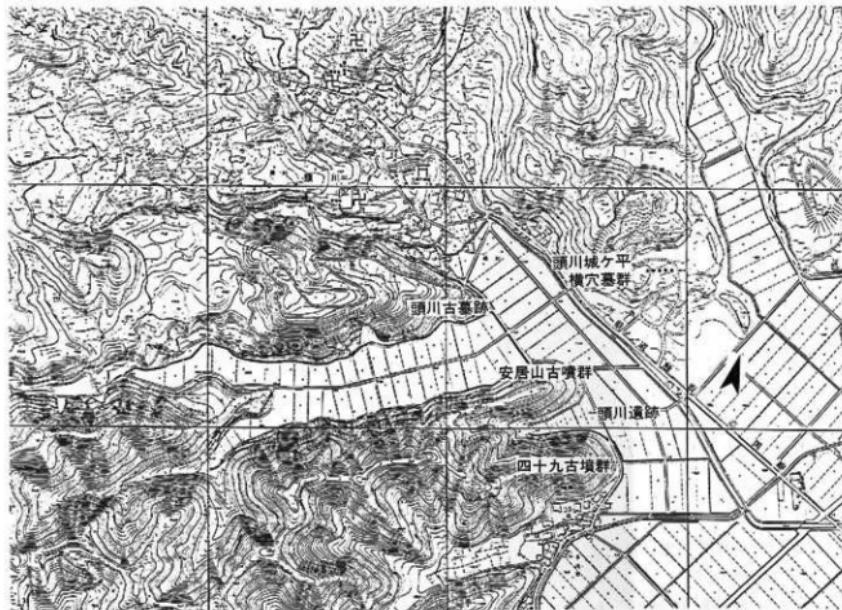
2. 第1次調査

昭和57年8月19日から同年9月16日までの期間、発見された4号墓の本調査と4号墓周辺の試掘確認調査を実施した。4号墓より、5体分の人骨と須恵器長頸壺1・鉄刀3・刀子4・金具11個を検出した。また、試掘調査によって4号墓周辺区域では、土砂採掘により消滅した横穴墓3基・現存する横穴墓11基を確認した。4号墓と合わせた横穴墓の総数は15基を数え、さらに北西へ延びる山斜面にも横穴墓の存在が予想された。第1次調査の結果、当横穴墓群のある山の上部は、既に背面が土砂採掘により削り取られ、残る側も急傾斜のため、高い位置にある横穴墓は崩壊の危険度が高いと判断し、また北西の山地一帯に横穴墓の存在が予想されたため、第2次調査を実施することとした。

3. 第2次調査

昭和58年7月4日から同年12月16日までの長期にわたり、第1次調査区域の標高50m以上についての本調査と、北西の山腹の試掘確認調査を実施した。その結果、新たに6基の横穴墓の存在が確認され、第1次調査で1基の誤認があることが判明し、頭川城ヶ平横穴墓群の横穴墓の総数は20基であった。そのうち、3基は土取工事により消滅したものであり、6基は本調査を実施したが、現状保存されている横穴墓は11基を数える。

(逸見)



第3図 遺跡地形図 (1/10000)

III. 調査の概要

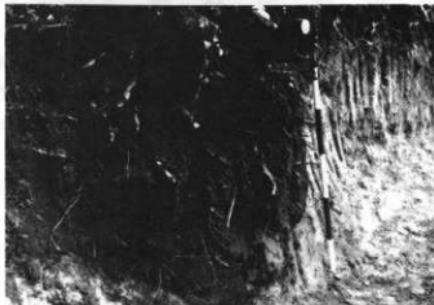
周辺部の確認調査（第4図）

昨年の第一次調査で、第13トレンチより平瓶が出土し、標高50m以上の地点にも横穴墓の存在が予想された。上部より堆土作業を行なうと、新たに16号、17号の横穴墓が確認された。そのため本調査は、当初予定していた5、14、15号と共に16、17号の調査を行なうことになった。昨年の調査で第13号墓の存在が考えられたが、発掘により地山の落ち込みであった。発掘区の表土は極めて厚く、1m～3mに達した。表土を除去すると、円形の落ち込みや脚らみの目立つ地形である。標高約70mの最上部に位置する第16号墓より平瓶が出土した。第17号墓は、第16号墓よりやや下に位置し、刀子が出土した。本年度発掘した5基は人骨の遺存状況は良好であったが、全て天井部が落盤していた。

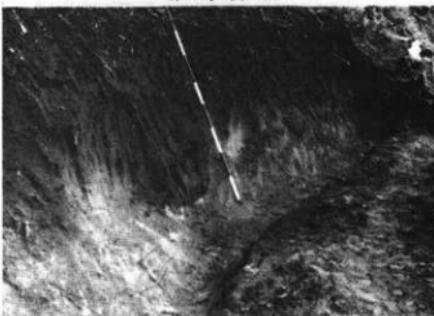
周辺部の調査は、隣接する北西斜面の確認のため、標高約80mまで適宜19本のトレンチを設けた。第21号墓より北西斜面に横穴の存在はみられず、標高80m以上は砂層のみである。第4トレンチより20号、21号、第8トレンチより19号、第9トレンチより18号の各横穴墓の存在を確認した。第20号墓は、幅約160cmのアーチ型の奥門部と幅約3.5mの前庭部と推定され、同横穴墓群最大規模の横穴である。奥門部の造り方から前室の存在が予想される。

本年度の調査で、第18号～第21号の4基が確認された。この結果、横穴墓群は4段に分かれ、1段目に8基、2段目に4基、3段目に3基、最上段に2基の存在が明らかとなった。（大野）

- ・発掘調査対象面積500m²
- ・発掘調査面積330m²
- ・試掘調査対象面積6,000m²
- ・試掘調査延べ面積510m²



第18号 横穴墓



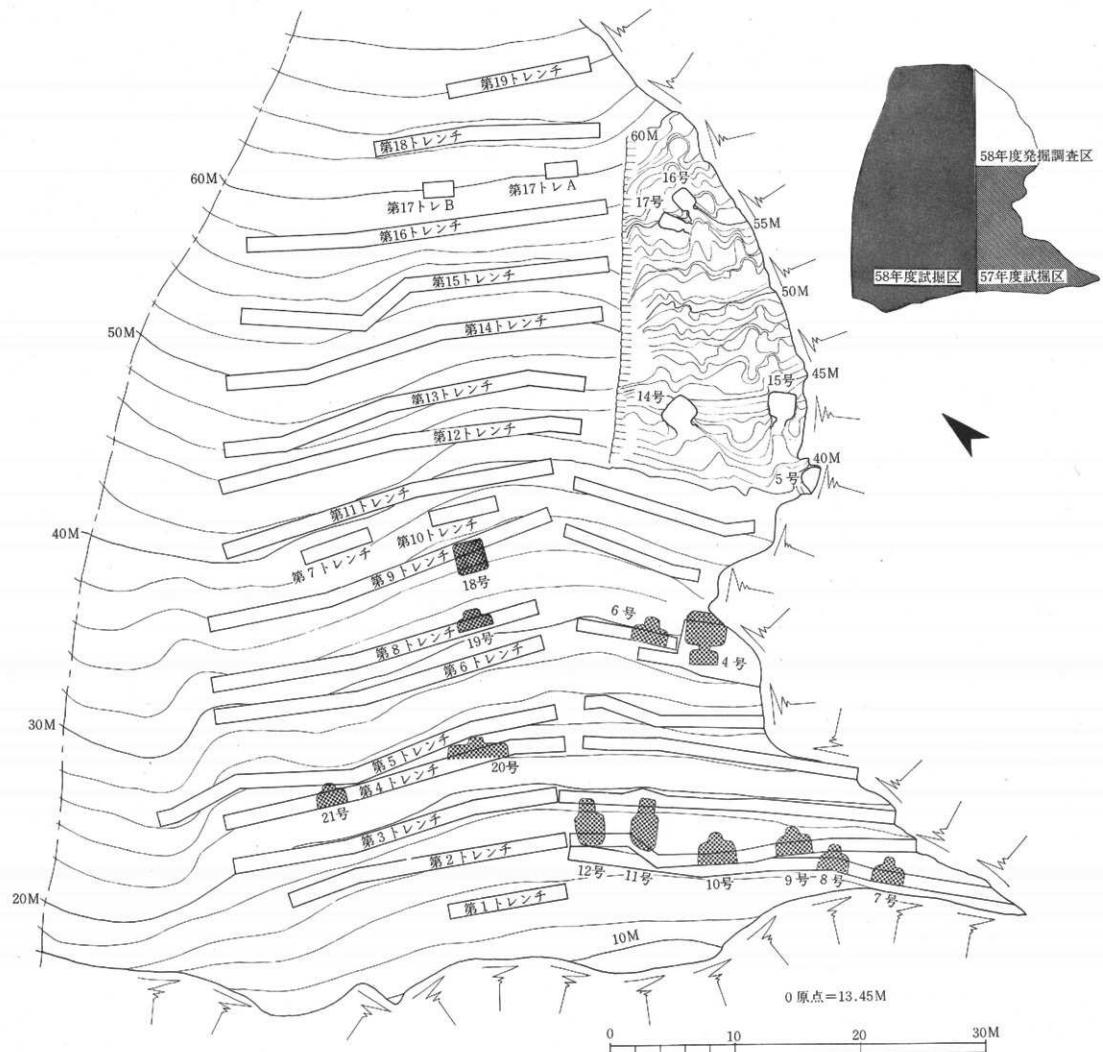
第19号 横穴墓



第20号 横穴墓



第21号 横穴墓



第5号横穴墓（第6・14図、図版2・3）

第5号墓は、地山の土取によるカッティングで人骨が露出して発見された横穴である。同墓は、墓群の中段に位置し標高52mを測る。同墓は、第15号墓の前庭部の南東下2mに位置する。玄室内は天井部が落盤し、地山塊と茶褐色土砂の混じり層で埋まり、人骨の遺存状況は良好である。人骨は、5号-A（成人男性）、5号-B（成人女性）、5号-C（幼児・性別不明）の3体が検出された。

同墓の南西側は、土取による破壊で前庭部・羨道部・羨門は欠如し、玄室の約5%も欠如している。残存している奥壁と北西側壁から推定すると、天井部の形状はドーム型と考えられる。玄室の西側隅は、自然流水の侵食を受けている。床面には、棺施設や周溝などの構造はなく、加工痕は確認できなかった。第5号墓は、残存している奥行きから推定すると、第14号墓と同形でやや小型と考えられる。玄室内に黒褐色土層を包含していないので、封緘は良好であったと考えられる。主軸方向は、N-65°-Wである。

自然遺物は、ニホンマイマイ、ヤマタニシ、小動物の小骨が出土した。副葬品の出土はなかった。第5号出土人骨はいずれも床面に食い込んだ状態であることから、片付けの行為などによる移動はなかったと考えられる。

5号-A人骨は自然流水で胸部より上部は腐食を受けていたが、頭骨は追葬の際に腹部の上に載せられたので腐食を免れた。5号-B人骨は土取断面に露見していたが、ほぼ完全な姿で残存していた。5号-C人骨は5号-A人骨の後から下の部分で散乱していた。成人2体は出土状況から仰臥伸展葬である。昨年、土取現場から採取された成人女性人骨や、残存している横穴の規模から推定すると、4体以上の埋葬が考えられる。人骨の残存状況から、5号-C、次は5号-A、3回目は5号-Bの順に追加葬されたと推定できる。人骨の配置は、主軸とほぼ平行位であり、男性人骨と女性人骨は正反対の向きである。これらは意識的に置かれて、何らかの意味を含むかは明らかではない。今後の解明すべき問題である。

（大野）

第15号横穴墓（第5・6・15図、図版4・5）

第15号墓は、横穴墓の中段（3段目）に位置し標高55mを測る。同墓は、第14号墓の東側に約7m隔てて位置し、入口は南西を向く。また、第5号墓は、前庭部の南東側で約2m下側に位置する。層序は、天井部がすでに落盤し、玄室内は、地山塊と茶褐色砂層が互層となり奥壁付近は空洞となる。

前庭部は、下層に茶褐色砂層が若干堆積するのみで浸蝕による落ち込みと同様のV字形砂層が複数となる。前庭部では杯身8が出土している。玄室は、封緘がみられず羨門部に厚く奥壁に進むにつれ薄く茶褐色土が堆積する。

人骨は、奥壁側に2体が頭を南に向け埋葬されほぼ原形をとどめ検出された。また、副葬品として須恵器（平腹1杯蓋2、杯身3、刀子1）が玄室入口部に認められた。その他に、釘が出土している。

構造

前庭部は、幅約1.2m、長さ3mで玄室にくらべやや南に向く、断面は、「U」字状となる。羨道部は、前庭部より約20cmの段をもち幅1.1m、長さ1mの規模で羨門となる。羨門は、幅80cmを測る。

玄室は、羨門部で幅2.5m、奥行2.4m、奥壁幅2.9mを測る平面形台形の形状となる。また、玄室は、入口部に高さ約5cmの段が設けられ、副葬品のうち杯蓋3、杯身2がこの段上にならべ埋納された状況で検出された。

壁高は、天井部が落盤しているためはっきりしないが奥壁で約95cmを測り立つ。形状は、アーチ型と考えられる。主軸方向は、N-45°-Wである。

遺物（第5・6図、図版7）

第15号墓は、今年度調査を行なった横穴墓内で最も出土遺物が多くほとんどが同墓内からのものである。

平腹は、玄室東側の床面から出土しており、追葬時に置き直されたと考えられる。形状は、口縁部が大きく外反し、

体上部がふくらむ。体高は、高く外面はナデ、底面にヘラケズリを施す。また、同様の平瓶は第17号墓からも出土しており玄室の同じ位置に置かれている。

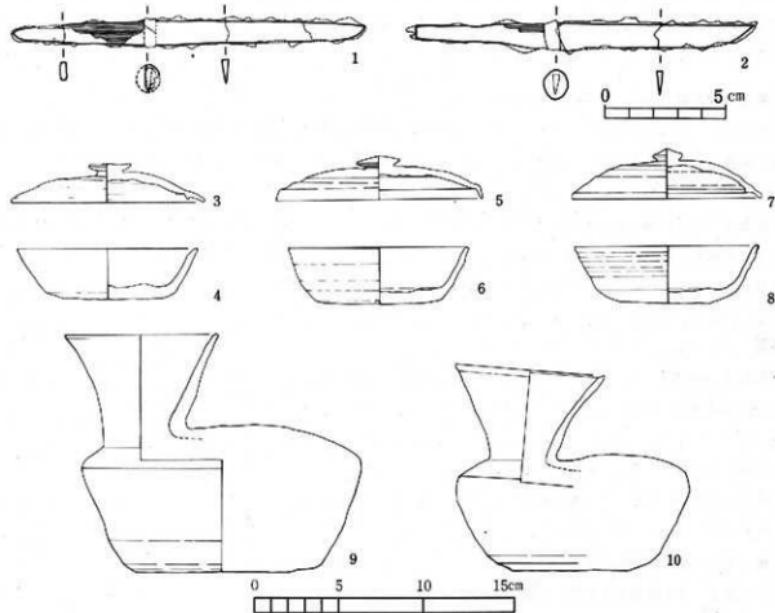
杯蓋は、口縁端部内面にかえりをもつ3・7と口縁端部が観く立つ5がある。3は、扁平な宝珠つまみをもち器高は低い。7は、宝珠つまみが小さく、器高が高くいずれも天井外面へラケズリ、内外面にナデを施す。

杯身は、玄室入口部の段上から杯蓋と共に4・6が前底部から8が出土している。いずれも底面からゆるく外反し内外面はナデ、底面はヘラケズリを施す。刀子は、刃渡14.6cm、幅9mm、柄部5cmで木質が残り柄元には金具が付けられる。また、同17号墓でも同様に淡門部から出土しており、平瓶、刀子などは、葬礼のために一定の位置に埋納された可能性がある。

釘は、玄室内の奥壁側と西南邊に多くみられる。釘にはほとんどのものに木質が残り元部に横目の木質、先部が縱目の木質となる釘Aと横目の木質だけが残る釘Bがある。釘の总数は、51本でうち縱目の木質が残るもの21本（うち曲ったもの10本）、横目の木質だけが残るもの20本（うち曲ったもの6本）、不明のもの10本である。（第6図）

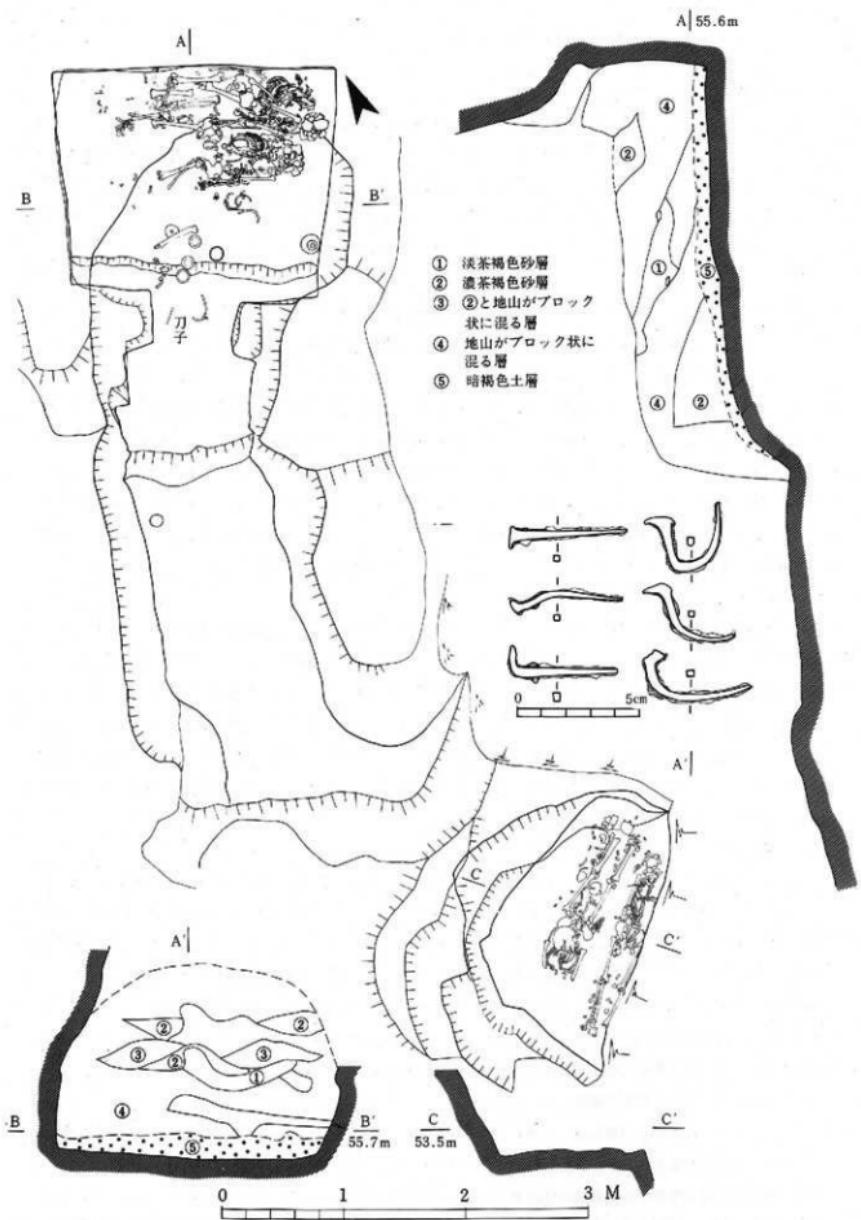
人骨は、2体が玄室奥に頭を南東に向いた仰臥伸展葬で埋葬される。いずれも熟年の男性で最初に埋葬された15-Aは、木棺に入れられていたと考えられる。同人骨は、上体が追葬時に奥壁間に押しやられている。また、伸展葬としたが、膝を曲げて納棺されていたかもしれない。

15-B号人骨は、左膝下と左側の肋骨などが淡門付近から玄室東南側に移動しているが、遺存状況は良い。人骨の移動は、横穴の開口時に動物等により行なわれたと考えられる。



第5図 頭川城ヶ平横穴墓群出土遺物実測図

1・15号墓出土刀子(%) 2・17号墓出土刀子(%) 3~9・15号墓出土須恵器(%)
10・16号墓出土須恵器(%)



6図 第5号・第15号横穴墓実測図(%)
出土訂実測図(%)

4. 第14号横穴墓 (第7・17図、図版3・4)

第14号墓は、当横穴墓群の中段（下方より第3群目）標高約55m上に、入口を南々東に向て位置する。約1mの腐蝕表土層の下に、2~3mの薄茶色砂層があり、地山となる。地山と薄茶色砂層との境に、間欠的に濃茶褐色土層が混入し、南々東から北北西に向かって山の斜面に沿うように薄い層を形成しており、この層の発見が第14号墓検出の契機となった。第14号墓は、天井部は落盤しており、玄室内は落盤した天井部の地山塊と薄茶色砂層とが斜互層をなし、その下に前庭部、奥門部から続く濃茶褐色土層があり、人骨はこの層から検出された。

構 造

第14号墓は、当横穴墓群で調査した横穴墓の中で、最大の規模である。平坦な前庭部から短い狭道部を通って、広く高い玄室へと続く。前庭部は、南側が山の斜面なので原形は不明だが、幅2.5m長さ3m程の広がりを有し、狭道部へ緩く昇斜する。前庭部から狭道へ移行する間に、幅30cm深さ20cmの落ち込みがあり、東側壁に小さい切り込みが認められ、造墓の整形に際してできたものかどうか判明しないが、封鎖施設跡の可能性もある。狭道部は、幅90cm長さ50cmと短く、渓門に続く。渓門は、幅約90cmで、側壁の変曲から高さ約100cmと推定され、玄室中心よりやや左にある。

玄室は、渓門部で幅約220cm・中央部で幅約270cm・奥壁部で幅約240cm・奥行260cm・天井部の落盤のため玄室高は不明だが奥壁高約130cmを計測する。平面形は、方形に近いや横長の隅圓台形であり、奥壁に沿って底浅の幅5~10cmの溝が1条ある。玄室床面には、浸水による凹凸があるが、全体的には平坦な床面である。奥壁は、入口方向へ弧を描くように傾斜し、両側壁と天井に球状につながるドーム型である。主軸方向は、N-10°-Wである。

遺 物

第14号墓は、当横穴墓群中、最大規模で最多数の人骨が埋葬されているが、副葬品は発見されていない。東側7mにある第15号墓から、須恵器の杯身・蓋3組と平瓶1点が出土していて対照的である。第14号墓は副葬品はないが、遺体安置用と推定される板状の残存木質や棺等の製作に使用したと考えられる鉄釘の出土に注目したい。木質は、玄室内に広く分布するが、左側と中央に密集する。玄室床面に付着するものや人骨と人骨の間層から出土するものがある。鉄釘は、平均長5.8cmで頭部をL字型とし、断面は四角形で先端は尖鋒である。木質が元部で横目・先部で縦目に付着する釘27本と全体に横口付着の釘33本及び不明の釘13本の計73本が出土している。木質の織維方向は、棺状のものに打突する部位により相違すると考えられる。

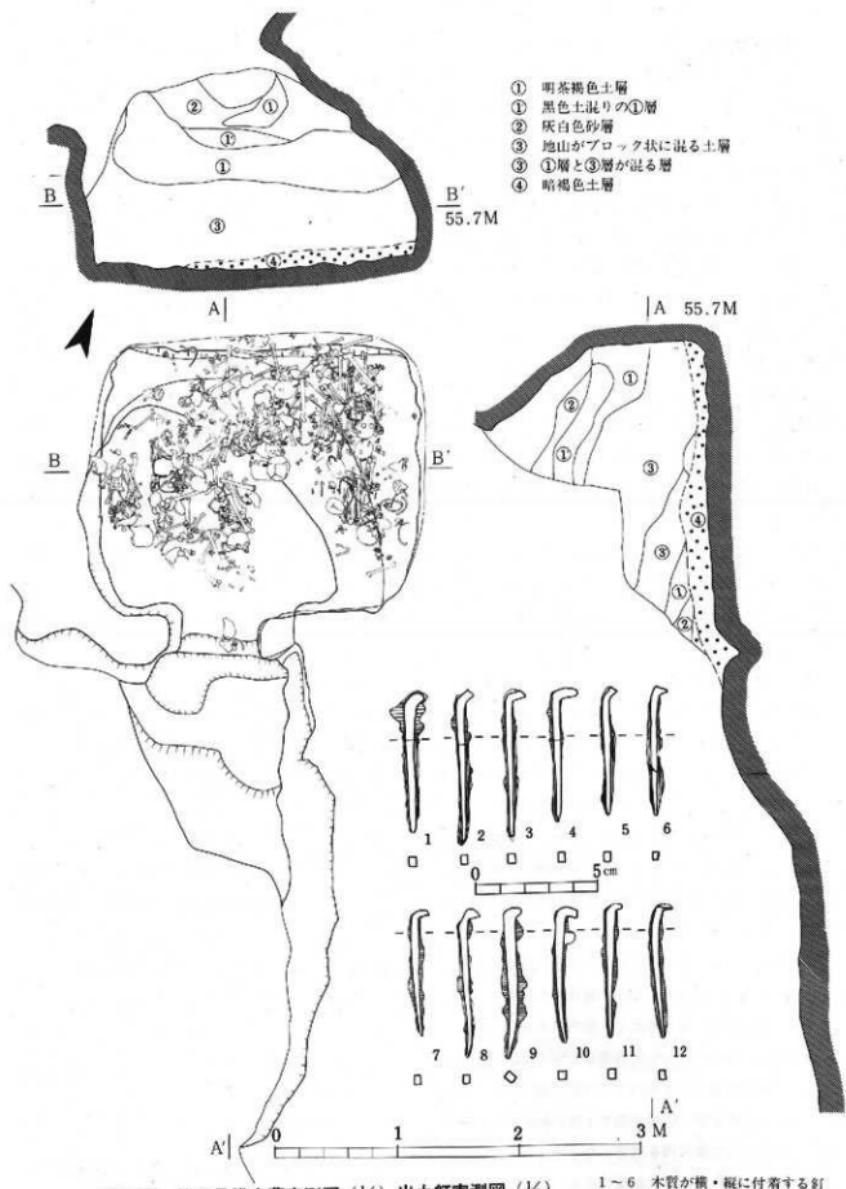
人 骨

玄室内に埋葬された人骨は、3群に分布する。玄室左前半部に1群・中央後半部に1群・右側に1群と寄せられている。多数の骨が自然と入り組むため、埋葬姿勢や追葬順は不明だが、人骨が3群に分かれるのは、追葬時に新たな置場所を確保するため、それ以前の骨は整理分別されずに押し動かされたと考えられる。頭蓋の個数から、13体を確認するが、右上腕骨の分類によれば14体を数える。熟年男性3体・熟年女性1体・壯年男性1体・青年男性1体・青年女性1体・少年4体・幼年2体を検出した。幼年1体については、右上腕骨の1点だけを確認する。

1基の横穴墓の埋葬個体数としては、当横穴墓群の他の横穴墓に比して極めて多い。当横穴墓群の南西2kmに所在する江道横穴墓群の第2号横穴墓から13体が検出された例に相当する。多数埋葬の原因としては、①疫病等の特殊な状況で死者が集中②長期間埋葬が継続したと推測される。①の場合は、大家族墓とも考えられるが、成人男性の個体数が多い点に疑問が残る。②の場合は、家族墓よりも同族墓的な横穴墓の可能性があるが、第14号墓だけ長時期使用したとする点は検討をする。また、副葬品が発見されないのは、盗掘あるいは自然滑落等によるとも推測されるがほぼ同位置にある第15号墓から副葬品が伴出するため、その可能性は薄く、当初より副葬品を伴わぬ埋葬と考える。

副葬品を伴わない多数埋葬を特徴とする第14号墓が、当横穴墓群の中で、どのような意味を有するのか、他例との比較を待って今後の課題としたい。

(逸見)



第7図 第14号横穴墓実測図(1/10) 出土釘実測図(1/2)
1~6 木質が横・縦に付着する釘
7~12 木質が横に付着する釘

5. 第16号横穴墓（第5・10図、図6・7）

第16号墓は、横穴墓群の最上部（標高約70m）に第17号墓と前庭部を共有し存在する。土層は、自然堆積による地山層が2～3mみられ、その下層部に茶褐色砂層が認められ横穴墓と確認できた。同墓は、天井部がすでに落盤した状況で検出された。そのため横穴墓玄室内は、天井部の落盤した地山塊と茶褐色砂層が互層となる。

澳門部は、封鎖がみられず茶褐色砂層が澳門部から玄室内にかけて入口部に厚く玄室奥に進むにつれ薄く堆積する発見当初天井部が落盤しており横穴内の入骨等の出土状況はかなり荒れていると推測したが調査が進むにつれて良好な状態であり人骨は、ほとんど失なわれていないと判断された。

人骨は、玄室中央部から奥壁にかけて数層に積み上げられておりかたづけが行なわれたと推測できた。そのため、現位置を保つものは認められず埋葬状態を知ることは困難であった。また、人骨にまじり小動物の骨、カタツムリなどの自然遺物が検出された。

構造

前庭部は、幅2.5～4m、長さ約4mで扁状に広がる不成形な形状となる。床面は、地山が石灰質の砂層のため雨、木の根等により浸透され直径約1mの穴や溝状の落ち込みが認められ、かなり荒れている。

玄道部は、前庭部より約80cmの段をもち床幅約60cmで作られる。澳門部は、幅約30cm、高さ約10cmで1段高くなり封鎖用の施設と考えられる。玄室内は、澳門部より約5cm低くなり側壁・奥壁にそって排水用の溝（幅約10cm）を設ける。

玄室は、澳門部で幅約160cm、奥壁で幅180cm、奥行180cmのやや澳門部が狭い凸形の平面形で、奥壁は立つ。玄室は東側が西側にくらべいくぶん広くなる。天井部は、落盤のため明らかでないが奥壁・北側壁などの形状から推測するとアーチ型と考えられる。主軸方向はN-18°-Wを測る。床は、奥壁側から斜めの工具痕（幅10cm、深さ5cm）が、多数認められる。

遺物（第5図、図版7）

遺物は、須恵器平瓶と自然遺物が出土している。平瓶は、玄室東側の壁際に置かれ、床面から約5cm浮いた状況で検出された。このことは、玄室内のかたづけまたは、追葬時に東壁側へかたづけ置かれたと推測される。形状は、口縁部が大きく外反し、体上部はややふくらむ。体高は高く、外面はナデ、底面はヘラケズリが施される。

自然遺物としては、ニホンマイマイ・ヤマクニシ等が多数出土する。

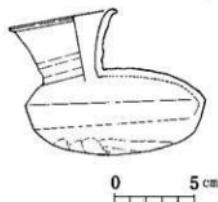
人骨は、壮年男性1体・老年女性1体・青年期の女性1体・性別不明の少年期1体の4体の人骨が検出された。玄室内は、かたづけが行なわれており埋葬順等は確認できない。かたづけが追葬のためであれば棺または遺体は横置と考えられる。また、かたづけが追葬のためないと考えれば、なぜかたづけが行なわれたか疑問の残るところである。

6. 第17号横穴墓（第5・9・10・11図、図版5・7・16）

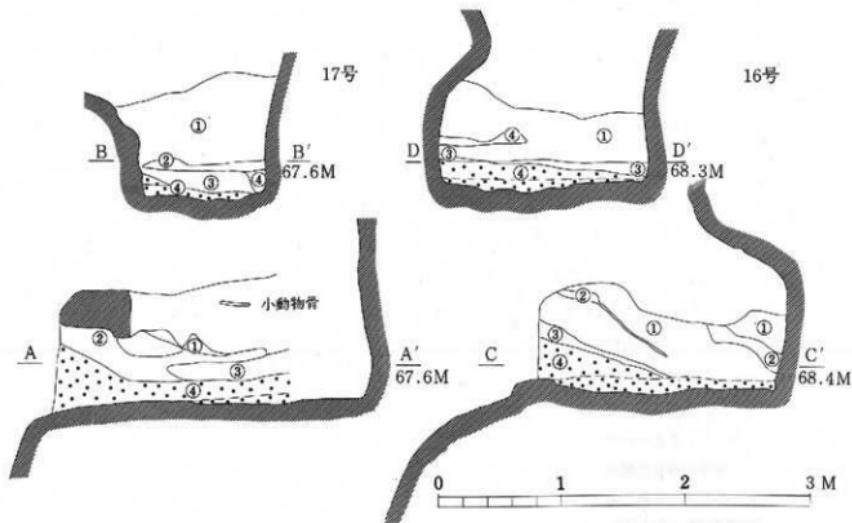
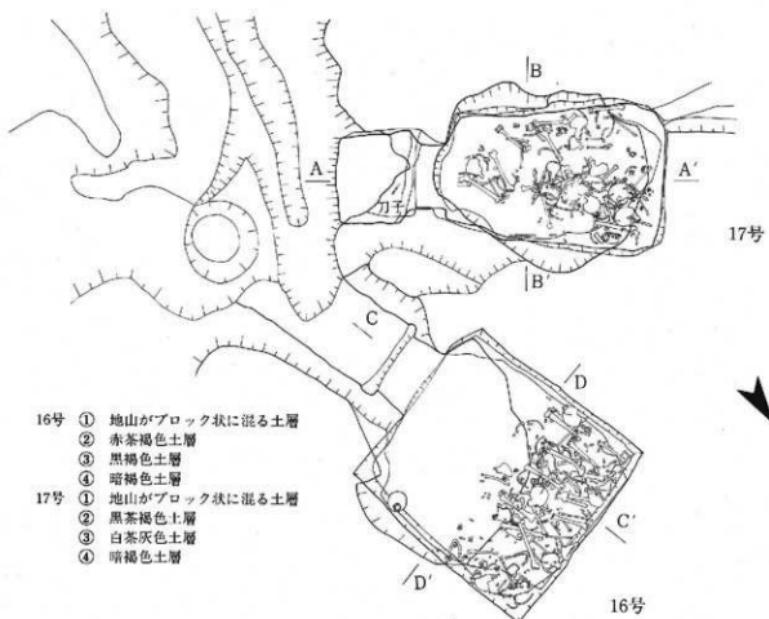
第17号墓は、第16号墓の北西側に存在し前庭部を共有する。天井部は澳門部を除き落盤している。層序は、地山の風化した砂層が上部に約2～3m堆積し、土砂を取り除くと茶褐色砂層が検出でき横穴墓を確認した。

玄室内は、地山ブロックと砂層が互層となり下層に黒・茶褐色土の堆積が認められる。茶褐色砂層は、玄室内に入口から奥に進むにつれしだいに薄く堆積する。玄室内の土砂を排土中に①層上部で1体の動物骨が検出された（第11図）。動物は、タヌキで巢穴として横穴内を利用したと考えられ、西側奥壁に床面から幅30cm、高さ50cm、奥行3m以上の横穴が掘られる。そのためか横穴内の入骨は散乱している。

構造



第8図 第1次調査出土の須恵器実測図(1)



第9図 第16号・第17号横穴墓実測図 (1/6)

第17号墓は、発掘調査を実施した横穴墓の中で最も床面積が小さい。羨道部は短かく前庭部は約60cm高くなり、幅70cm、奥行60cmの規模をもつ。

羨門部は、天井が幅50cmで残り高さ60cm、幅50cmの規模をもつ。玄室は、羨門部で幅95cm、奥壁で幅120cm、奥行190cmを測り、長台形の平面形で西側がやや広くなる。高さは、天井が落盤しておりはっきりしないが奥壁で高さ110cmを測る。また、奥壁はほぼ垂直に立ち上がり、アーチ型の形態と考えられる。主軸方向は、N-9°-Eである。床面は、工具痕が残り凹凸している。

遺物(第5・9図、図版7)

遺物は、刀子が羨門部東側壁に付いて出土している。刀子は、全長14cm、幅1cmで刃渡り8cm、柄部6cmを測る。柄には、木質が残り幅6mmの金具が付けられる。その他に、自然遺物としてノトマイマイ、ヤマタニシ、モグラ、ヘビ等の骨が出土している(早稲田大学金子浩昌氏による)。また、第17号に共伴するかは不明であるが、昭和57年度の試掘調査で第13トレンチ中央部から平版(第8図)が出土しており第16、17号の副葬品である可能性が強い。

人骨は、壮年期の男性1体、老年男性1体と老年女性1体の3体が認められる。頭蓋は、3個が玄室の北東奥側に位置している。その他の人骨は玄室内に散乱しているが1部のものは、かたづけが行なわれ北東側へ集められていた可能性をもつ。また、遺体を横に置くことは、羨門部の大きさ、その形状から不可能であり縱置されたと考えられる。

人骨の散乱について

第17墓は、タヌキが巣穴として利用したと考えられる。また、北側の試掘調査区でも同様にタヌキの頭骨(図版16)が出土しておりタヌキが城ヶ平山一帯を生活の場としていたと推測できる。このことは、1部の横穴墓内を巣穴または通路としたりし、開口してい

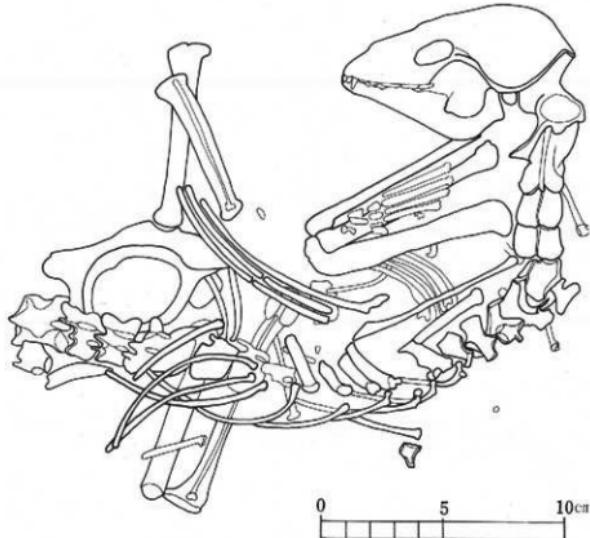
る横穴墓内へはいり込み人骨等

を散乱させている可能性をもつ。

また、タヌキは雜食性の動物であり、小動物をもち込むことは十分に考えられる。昨年調査した第4号墓で出土しているモクズガニやカメ(スッポン)の甲の骨板等は動物によるもち込みの可能性をもつ。第16、17号墓などでは、土層の状況から羨門部の閉鎖が充分に行なわれたと考えがたく板等による閉鎖であれば横穴が放置された後比較的長時間の間横穴は開口していたこととなり、動物等の出入りは容易に行なわれたと考えられる。

そのため、人骨等の保存状態が良好であるにかかわらず横穴墓内の入骨が散乱する状態となると推測される。

(酒井)



第10図 17号横穴墓出土小動物骨実測図(1/2)

IV 調査の成果

1. 埋葬について (第14~17図)

第5・15号墓では、埋葬時に近い形で人骨を検出している。第5号墓では、横位に2体、第15号墓では横位に2体でいずれも仰臥伸展姿の形をとる。頭部の位置は、第15号墓で南向き、第5号墓で東と西向きとなり一定した方向をもたない。このことは、遺体に一定の方向性をもたせ埋葬するのではなく横穴墓の形状、追葬の状態など現状に応じ遺体を埋葬するためと推測される。このことは、横穴墓の床面積と埋葬遺体数との関係にも表れ、第16号墓では、4体の遺体を埋葬し、床面積が小さくなると一定の時間をおいてかたづけが行なわれ、埋葬スペースを作る作業を行なう。しかし、床面積が広く遺体数の少ない第15・5号墓（第5号墓は、全体の%を失っており断定できない。また5-B号人骨の奥壁側に幼児骨が一体散在する。）では、かたづけは行なわれていないと考えられる。しかし、第17号墓では、床面積が小さいため追葬ごとにかたづけが行なわれなければ埋葬できないと考えられるが現状は散乱状態であり確認できない。これは、横穴墓のもつ墓制と被葬者の関係を示すと考えられ埋葬→追葬を順次行なう中の1つの行為と理解できる。その状況は、第15号墓では、15-A号人骨が玄室奥壁にそって埋葬され次に15-B号人骨を追葬する。その時に人骨を奥に押し込み（押し込み行為）その前に埋葬する。以後は、順次埋葬され床面がいっぱいになるまで追葬され第17号墓にみられるかたづけ（かたづけ行為）が行なわれ、以後はこの繰り返しとなる。はなはだしい場合には、第14号墓にみられる状況を示すと考えられる。第14号墓の人骨の分布は、ほぼ頭骨を中心としてかたづけ行為が行なわれている第1810・731・301・27号人骨などと玄室内に細長く分布し頭骨がどちらかの端にみられる第1310・1200・400・136があり押し込み行為を行なった人骨と考えられその検出状況は、異なっている。また、かたづけ行為は、第17号墓にみられる追葬を伴わない例がみられ、洗骨やそれに伴う埋葬儀礼が存在したかもしれない。

2. 鉄釘について (表1、第11図)

第14・15号墓玄室内から鉄釘の出土をみた。鉄釘は、木棺に使用されたと考えられ玄室の分布は第11図に示した。釘は、板目・正目の板を組み合せ箱を作る場合、釘に残る木目は、四隅の小口にのみ元部で横目、先で縦目の木質（以下釘A）となる。底板・側板・上板では、いずれも横目の木質（以下釘B）が残ること

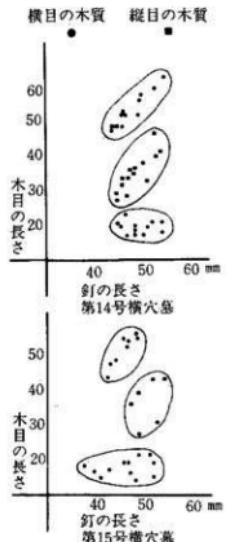
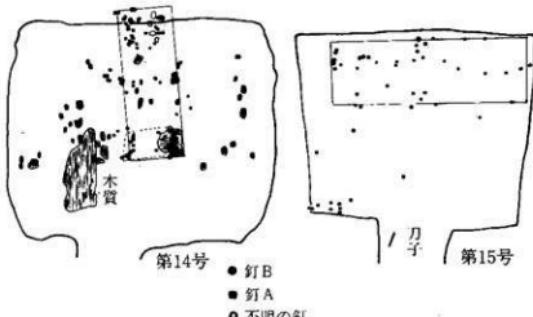


表1 横穴墓内出土釘計測表



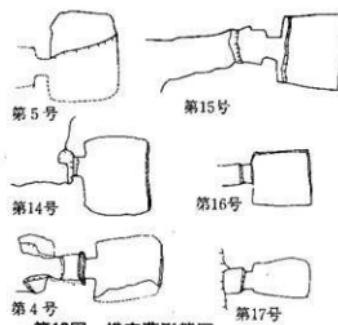
第11図 釘分布図

となる。表1は、横目・縦目の木質の全長・釘の全長を表とした。釘Aは、横目の木質が板の厚さ、縦目が組み合せる板に打ち込まれた長さを示す。表1の全長20cm前後に集中する横目の木質の全長は、板の厚さとなる。また、縦目の木質の全長は、4cm前後に集中し、打ち込まれた長さを示している。釘A・Bの分布は、第14号墓で奥壁側と玄室入口部に約150cm離れ釘Aが分布する。釘Bは、この150cmの中に幅50cmほどで分布している。また、木質の分布をみると横の木質（玄室に対して）が分布する部分に釘Aが分布し木棺の大きさを示すと推測される（第11図）。

第15号墓は、玄室中央部から奥に釘が分布し釘Aと、釘Bの分布は第14号墓とはほぼ同様となる（第11図）。しかし、中央部に数本の釘Aがみられ棺を補強する添え木等が施されたと考えられる。木棺は、全長約180cm、幅約60cmと推測される。陶器出土の釘は、第14号墓が総数73本（釘A27本・釘B33本・不明13本）、第15号墓が総数51本（釘A21本・釘B20本・不明10本）で、小口の釘（釘A）が多い。また、曲ったものは、前者で2本、後者で16本を数え、後者の16本が充分に機能を果していないとすれば、35本ほどが木棺に使用されたと考えられる。とすれば、第14号では、71本となり35本の倍数の釘となり、2つの木棺が存在した可能性がある。しかし、どの個体が埋葬されたのかは、判断できないが比較的後半期に埋葬された個体と考えられる。また、玄室内には、多数の木質が残存しておりその分布をみるとかなりの個体数が埋葬に板等を利用したと推測される。

3. 横穴墓の年代について

第15号墓では、平瓶・杯蓋・杯身が出土している。杯蓋（3・5）は、口縁端部・宝珠つまみの特徴から富山市金草1号墓〔森田他1970〕にみられる様相に似る。また、7は、いくぶん器高が高く宝珠つまみが小さく高いもので、古式な様相と考えられ小矢部市西越沼窯跡にみられる様相に似る〔伊藤・西井1981〕。また、平瓶も同様の時期と考えられる。杯蓋は、3・5が7C後半、7が7C中ごろに編年される。これらの遺物が同時に副葬されており遺物にも時期幅がみられる。けれども、横穴墓の築造は、ほぼ7C中ごろで有続時期は7C末までと考えられる。また、第16号墓出土の平瓶も7C半ごろに編年される。第15・16号墓は、ほぼ同様の平面形をもち築造時期も大差なく作られたと考えられる。第5・14号は、ドーム型の形状である。ドーム型の横穴墓は、昨年調査を実施した第4号墓があり7



第12図 横穴墓形態図

C中ごろに築造されたと考えられる。第14号墓は、時期を断定できないが14体の遺体数は多量であり時期幅が考えられる。また、多量の人骨の出土は、共同的な墓地（同族墓）なものかもしれない。第17号は、同墓群内で最も小形で横穴墓の最終的な様相と考えられる。

以上をまとめると頭川城ヶ平横穴墓群の上部にみられる6基は、7C前半に第5・14号墓が築造され、次で7C中ごろに4号、15・16号墓、7C後半に17号墓が作られる。また7C中ごろからは追葬期となりさかんに追葬が行なわれほぼ7C代にその終焉を迎えたと考えられる（第13図）。（酒井）

	6C後	7C前	7C中	7C後	8C前
4号			+	-	-
5号		+	+	-	-
14号	+	-	+	-	-
15号	+	-	-	+	-
16号	+	-	-	-	-
17号	+	-	-	-	-

第13図 横穴墓の時期

4. 横穴墓の形態・分布について (第4・12・13図)

横穴墓の形態が整理されている法皇山横穴墓群の調査報告〔田嶋他1951〕によれば、I期（6C末～7C初）の有前室ドーム型・II期（7C初～後半）の有前室アーチ型・III期（7C後半～末）短渢道アーチ型の3期に分類される。

富山県内では、前室をもつ横穴墓は発見されておらず、一様に比較できないが、県下で6C末～7Cに相当するのは金屋陣の穴横穴墓群があり、前部が長く渢道部が明確なドーム型を特徴とする。その次に続く7C前半期から、頭川城ヶ平横穴墓群が登場する。7C前半～中頃にかけて、第5号墓・第14号墓そして第4号墓が築造されたと考えられる。玄室床面は隅丸台形で渢道部は短くドーム型である。続く7C中頃～後半に第15号墓・第16号墓が造られたと推定する。玄室床面は台形で渢道部は短くアーチ型である。この期には、桜町横穴墓群・江道横穴墓群がある。7C後半～末期に、第17号墓が造成されたと考える。玄室床面は長台形、渢道部は短く不明瞭で全体に筒型である。同様の時期に、氷見市坂津・加納横穴墓群内のこれと似た横穴墓が相当する。

第1次調査時で、当横穴墓群の分布の特色として、2基1単位を指摘した。それは、2基が約2m程の間隔で並ぶ関係のことである。標高21～23mに並ぶ第1段を形成する第7号墓と第8号墓・第9号墓と第10号墓・第11号墓と第12号墓及び標高38mの第2段である第4号墓と第6号墓、そして標高68mにある第4段の第16号墓と第17号墓、これは、2基が前部を共有する単位群である。しかし、標高55mにある第3段の第14号墓と第15号墓は、約7mの間隔があり前部を共有しない。

以上のことから、頭川城ヶ平横穴墓群は、造墓に容易な良好の地から順に、具体的には低い所から高い所へ横穴墓を築造したと考える。形態的類似は同時期性を示すと解釈するが、単位群構成は、第16号墓と第17号墓との時期的差違が認められることから、他の要因が考えられる。例えば、造墓単位における同族的関係あるいは從属的関係を示すと推測されるが、その解明には資料の充実する機会を待ちたい。

(逸見)

5. 周辺の横穴墓群について (第1図)

富山県内に現在確認されている横穴墓群は、大きく氷見地方と、小矢部市から高岡市にかけての小矢部川左岸に点在するものと、富山市西方の呂羽丘陵と3群に分けられる。県東部には、呂羽丘陵の2群を除くと他の地域では、未だ横穴墓群の確認はされていない。このように、大部分の横穴墓群は、県西部に集中している。

富山市の呂羽丘陵には、番神山横穴墓群・金屋陣の穴横穴墓群がある。番神山横穴墓群は、標高約40m、幅約30mの範囲に10数基確認されている。出土遺物は、須恵器・人骨があるが、多くは散逸している。金屋陣の穴横穴墓群は標高約70m前後に、幅約20mの範囲に12基確認されている。出土遺物は、須恵器・上器・刀子等がある。各々の横穴墓群は、富山平野を一望にできる景勝の地に立地している。

能登半島の付け根に位置する氷見地方は、横穴墓群の多いところである。加納横穴墓群・坂津横穴墓群・脇方横穴墓群等はよく知られている。加納横穴墓群は、蛭子山南東の台地中腹標高10～20mをとりまくように、幅約500mに3群、56基が確認されている。各々の横穴墓は、構造・大きさ・内部施設共に多種多様である。出土遺物は、須恵器・刀子等があるが、その多くは散逸している。坂津横穴墓群は、十二町坂津字新ケ谷内の丘陵西斜面に、標高7～25mに3段、幅約60mの範囲に36基確認されている。近くには十二町潟があり、往時布施湖と万葉に歌われ、規模も現在よりかなり大きいので、横穴墓は湖を見おろす地に立地していたであろう。横穴墓の大きさは、加納横穴墓群に比べて全体に小さめである。出土遺物は、人骨・須恵器・上器・直刀・金環等がある。脇方横穴墓群は、舟ヶ端といわれる海に臨んだ丘陵南西側中腹に、標高8～15mに1段、幅150mに現在7基確認されている。出土遺物は、人骨・須恵器・土器・直刀・管玉・切子玉等がある。氷見市内には、他に阿尾城山横穴墓群(11基)・阿尾瀬戸ケ谷内横穴墓(1基)・朝日谷内横穴墓(1基)等が現在確認されている。

高岡市の北西部から福岡町・小矢部市北に連なる丘陵は、二上断層崖と呼ばれ、貝殻分・有孔虫殻などを多量に含む石灰岩砂層が広く分布している。この丘陵には、小矢部川支流の短い小河川が、各々小さな開析谷を形成している。そして、それぞれの水系を単位とする集落が、この丘陵の急斜面に横穴墓を築いた。小矢部川沿いに上流から、桜町横穴墓群・田川横穴墓群・鳥倉横穴墓群・加茂横穴墓群・馬場・城ヶ平横穴墓群・江道横穴墓群・頭川城ヶ平横穴墓群二上横穴墓群と続いている。桜町横穴墓群は、二上断層崖に分布する南西端に位置し、子撫川が開いた谷の急峻な斜面にある。標高55~70mに3段、11基が確認されている。出土遺物は、人骨・須恵器・直刀・金環・骨角器がある。城ヶ平横穴墓群は、城ヶ平山東斜面中腹標高100m付近に、幅約65m数段にわたって43基造られている。小矢部川左岸に立地している中で最大の規模である。出土遺物は、須恵器・直刀・刀子・鉄鏽・勾玉・切子玉・金環等がある。城ヶ平横穴墓群より少し上流に、銀象嵌を施した鉄製頭椎大刀の把頭を出土した、馬場横穴墓群(9基)が確認されている。江道横穴墓群は、広谷川の狭い開析谷にある。通称高の宮の砂岩質の山腹標高30~40mに2段、幅約45mの範囲に15基確認されている。その第4号・第5号横穴墓は石柱をもって築かれた羨門をもつ、特殊なものである。出土遺物は、須恵器・直刀・骨角器がある。

頭川城ヶ平横穴墓群は、小矢部川左岸に數km毎に連なって分布する横穴墓群の中に位置している。水見地方の横穴墓群とは、山を隔てて接し、潟・湖・海・河などで繋がる。また、横穴墓群の周辺には、多くの古墳群がある。これらの中の、特に後期古墳群と横穴墓群の関係や、造墓集団の活動と他の地域とのより明瞭な相互関係は今後の大きな課題である。

(大野)

引用・参考文献

- イ 池上 恒 1980 「横穴墓」「考古学ライブリー6」 ニューサイエンス社
石川県立郷土資料館編 1981 「須恵器」 須恵器展パンフレット
伊藤隆三 1981 「富山県小矢部市平桜岡山3号窓跡」 小矢部教育委員会
ウ 上野 章 1983 「IV まとめ 須恵器・土器について」 「富山県小杉町大門町小杉流通業務団地内遺跡群 第5次緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会
オ 岡崎卯一 1967 「富山市安養寺番神山の横穴墓」『大境』第3号富山考古学会会誌
岡崎卯一 1968 「富山市安養寺横穴第7号墓の調査」『大境』第4号富山考古学会会誌
タ 高瀬重雄他 1957 「高岡市江道横穴古墳群調査報告書」高岡市史料編纂委員会
高堀勝喜・吉岡康輔 1985 「古墳文化の地域性—北陸一」「日本の考古学IV」 河出書房
ニ 西井龍雄・伊藤隆三 1981 「富山大学考古学講話会資料(No.19)」
ハ 橋本澄夫・田崎明人・高堀勝喜・湯尻修平・新家秀夫・梶幸夫 1971 「法皇山横穴古墳群」 加賀山教育委員会
橋本澄夫・山田 澄 1973 「金沢市塙崎横穴古墳群」 石川教育委員会
ヒ 水見高等学校歴史クラブ 1964 「富山県水見地方考古学遺跡と遺物」
フ 深井三郎 1966 「水見海岸・二上山学術調査報告」
藤田富士夫 1976 「富山市古沢・金原地内古墳概要調査報告書」富山市教育委員会
藤田富士夫・岡崎卯一 1970 「富山市金草第1号窓調査報告」富山市教育委員会
古岡英明 1972 「古墳時代」「富山県史一考古編」
ミ 渡 義・西井龍雄 1971 「小矢部市のあけぼの」「小矢部市史」
ワ 和田一郎 1959 「古墳文化の時代」「高岡市史」上巻第2編

頭川城ヶ平横穴墓群出土人骨について

富山医科薬科大学医学部第一解剖学教室

森沢 佐歲・松田 健史

はじめに

昭和57年富山県高岡市頭川城ヶ平1-1地内丘陵地の土取作業中、横穴墓群から人骨が出土した。第2・3・4号の出土人骨については、昭和58年3月の第1次緊急発掘調査概要に報告した。今回、さらに発掘の進んだ5号横穴墓、および14号・15号・16号・17号の各横穴墓より出土した人骨についてその概要を報告する。

第5号横穴墓出土人骨

第5号横穴墓出土人骨の一部は、第1次緊急発掘調査の際に、すでに土取断面より露出していた人骨で調査の結果、青年期または壮年期の女性骨と報告した。今回の調査により全貌が明らかにされ、既往の女性骨（5号-A人骨と仮称）の他に、玄室内の北壁寄りに2個体分（5号-A人骨、5号-C人骨と仮称）の人骨が出土した。

1) 第5号-A人骨 出土状況（第14図） 出土位置：玄室北西壁寄りの床面。頭位：ほぼ南西位。

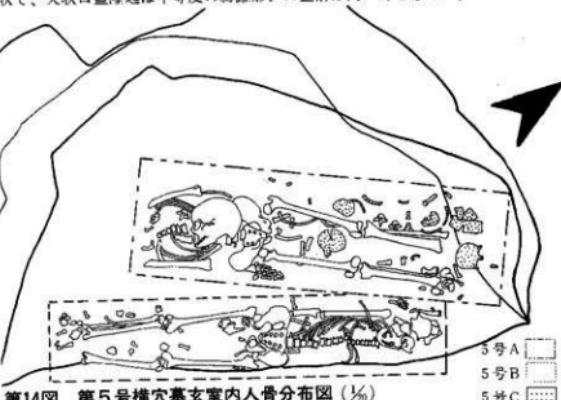
体位：仰臥位、左右上肢伸展位（左右とも内旋）、左右下肢伸展位。出土状態：ほぼ全身骨。色調：左右上腕骨近位端、左鎖骨胸骨端および頸椎、上位胸椎の椎体、棘突起などは一部腐蝕し、黒色の色調を示している。前記の部分を除く頭蓋骨、上肢骨、体幹骨、下肢骨は褐色を示している。

人骨所見（図版8、10、11） 主要頭蓋縫合の癒着：内板は三主要縫合とも完全癒着（Martinの4度）。外板は冠状縫合の右側頭部矢状縫合の泉門部、頭頂孔部で縫合の半分以上の癒着を認め（Martinの3度）、ラムダ縫合の三角部と中央部でわずかに癒着を認める（Martinの1度）。縫合骨はラムダ縫合（右1個、左2個）にみられる。

上面観：類五角形で、頭蓋長幅示数は74.6の長頭型である。側面観：頭蓋長高示数は73.5の中頭型である。前頭骨の膨隆は弱く、眉間の膨隆は強い（Brocaの3度）。頭頂骨の輪郭線は一様に弧状で、後頭平面の膨脹は強い。側頭平面は広く膨隆し、上・下側頭線は強い。左右の側頭筋には不完全な側頭骨前頭突起がみられる。左ブリオノン部には小さな翼状骨1個がみられる。頸骨弓は短く直線状で厚い。外耳孔は卵円形、前乳突結節は強く、乳突上棱は深い。乳突突起は大きい。底面観：大後頭孔は卵円形、頸窩は深く頸管は大きい。舌下神経管は左右とも1個。乳突切痕、後頭頭蓋溝は深い。下頸窩は深く、関節結節は強い。口蓋は深くU字形、口蓋示数は9.1.7の短型である。横口蓋縫合は直線状で、矢状口蓋降起は中等度の筋錐形、口蓋溝は内・外とも深い。

側面観：家形で、頭蓋幅高示数は9.8.5の尖頭型である。上項線は強く、外後頭隆起は強い（Brocaの3度）。

顎面観：コルマンの顎面示数は8.4.0の低型、ウイルヒヨウの顎面示数は10.7.8の過低型、コルマンの上顎面示数は5.1.1の中型、ウイルヒヨウの上顎面示数は6.5.7の低型である。鼻根示数は11.2.2の鼻根前方突出型である。前頭骨の弯曲は強い（矢状前頭示数85.6）。前頭結節は弱く、眉間・眉弓は強い。鼻骨は



第14図 第5号横穴墓玄室内人骨分布図(1/2)

広く大きく膨隆している。鼻示数は 5.6.9 の低型である。梨状口は卵円形、眼窓口は鈍円四角形、眼窓示数は 7.3.7 の低型である。滑車棘は強い。眼窓下縫合は癒着完了している。上顎骨は大きく、上顎歯槽示数は 1.3.0.8 の広型である。上顎骨の歯槽突起は 8 部で萎縮がみられる。歯槽中に残存する上顎歯は 1 例あり (8)~(3), (1), (5)~(8)、その咬耗度は Martin の 1~2 度である。これらの上顎歯の歯冠周辺には歯石がわずかにみられ、う歯はない。

下顎骨：下顎体は広く高い。歯槽部の萎縮はみられない。オトガイ下切痕は強く、角前切痕は欠除し、いわゆるユリイスク型である。オトガイ孔は右と右間の直下に位置する。オトガイ棘は強く、下顎角の外窩は強い。翼突筋粗面は粗糙である。筋突起は細く、その先端部は鋭い。下顎切痕は狭く深い。歯槽中に残存する下顎歯は 1.5 例あり (8)~(1), (1)~(3), (5)~(8)、その咬耗度は Martin の 1~2 度である。それらの歯冠周辺にはわずかに歯石が付着し、う歯はない。

上肢骨

上肢骨：骨端線はすべて消失している。鎖骨(右)は太く、肋鎖靱帯圧痕は深い。肩甲骨は腐蝕のためか左右とも消失している。上腕骨は太く、三角筋粗面は広く粗糙である。大結節は大きく、大結節筋は強い。桡骨は太く、骨間筋は強い。橈骨粗面は大きく膨隆している。尺骨は頑丈であり、回外筋線は強い。

下肢骨：骨端線はすべて遮蔽消失している。寛骨は大きく、大坐骨切痕は狭い。坐骨結節は強い。恥骨結合面の溝・棱は不明瞭である。恥骨下枝は太く、閉鎖孔は卵円形である。大腿骨は長く太い。粗線は強くいわゆる柱状大腿骨である。筋筋粗面は粗糙である。骨幹上部は前後に扁平である。上骨幹断面示数は 7.7.4 の広型である。脛骨は長く太い。ヒラメ筋線は強く、鉛直線はみられない。胫示数は 6.9.7 の中型である。腓骨は長く太い。下肢骨の関節面の磨耗、辺縁の骨増殖などは認められない。下肢骨にはいわゆる蹠蹠による関節面の拡張面が認められる。

体幹骨：下位の胸椎および腰椎の椎体上・下面の辺縁や上・下関節突起の辺縁には棘状の骨増殖がみられる。仙骨の基底は広く、仙骨翼は狭い。仙骨前面の弯曲は強い（仙骨弯曲示数 9.0.9）。第一仙椎は腰椎化を示している。第 5 号-A 人骨の年令は、骨端線の消失、頭蓋縫合の癒着、上・下顎の第三臼白歯の磨耗、椎骨の骨棘の存在から判断して老年期の人骨である。諸骨はいずれも大きく、筋付着部は粗糙である。頭蓋の眉間・眉弓は強く、外後頭結節は強い。寛骨の大坐骨切痕は狭い。以上から男性骨である。左大腿骨最大長 4.17cm から推定身長は 1.60m である。

2) 第 5 号-A 人骨 出土状況 (第 14 図) 出土位置: 玄室ほぼ中央部の床面。 脳位: ほぼ北東位

体位: 仰臥位、右上肢伸展位、左上肢不明、左右下肢伸展位。
出土状態: I 次調査のさい出土したのは左頭頂骨、後頭鱗、左肩甲骨、左挽骨である。今回出土は頭蓋骨、体幹骨、右上肢骨、左上肢帶、左右下肢骨のはば全身骨である。ただし左の尺骨、左の手根骨、左の中足骨の大部分が出土していない。

色調: 黄褐色～褐色である。

人骨所見 (図版 113) **主要頭蓋縫合**: 内・外板とも認められない。蝶後頭軟骨結合は癒着している。前頭骨、頭頂骨、後頭鱗の内・外板は薄い。前頭骨の膨隆は強く、眉間の膨隆はやや弱い (Broca の 2 度)。上・下側頭線は弱い。側頭骨は小さい。頬骨弓は薄く波状である。外耳孔は梢円形である。乳様突起は小さい。大後頭孔は小さく円形である。後頭頸は小さく狭い。頸窓は浅く、頸管は左右とも欠除している。舌下神経管は左右とも 1 例、乳突切痕は右より左で深い。後頭骨底部は狭く、咽頭結節は弱い。下顎窓は深く、関節結節は弱い。口蓋は深く U 字形である。横口蓋縫合は直線状で、切齒縫合は約 1/3 残存している。矢状口蓋降起は弱い。コルマンの上顎面示数は 5.3.3 の中型である。ウイルヒヨウの上顎面示数は 7.0.3 の低型である。前頭結節は強い。眉間・眉弓は弱い。鼻骨は狭く、鼻示数は 5.3.2 の低型である。梨状口は卵円形でその下縁は銳利である。眼窓口は大きく円形であり、眼窓示数は 8.5.0 の高型である。滑車棘は欠損している。眼窓下縫合の癒着は右で完了、左で未完了である。頬骨の側頭突起は左右とも後製している。上顎骨は小さく、上顎歯槽示数は 1.1.2.0 の中型である。上顎骨の歯槽突起の萎縮はみられない。歯槽中に残存する上顎歯は 4 例あり (7), (6), (4), (6), M3 は未萌出。歯部は歯槽欠損のため不明。歯の咬耗度は 1 度であり、歯石がわずかにみられ、う歯はない。

下顎骨: 下顎骨は小さく狭く低い。歯槽部の萎縮はみられない。オトガイ下切痕は弱い。下顎結合は癒着完了。オトガイ陰起は中等度で、オトガイ結節は弱

い。オトガイ孔は下に位置し、オトガイ棘は弱い。顎舌骨筋線は弱く、顎舌骨筋神経溝は浅い。下頸枝は広く低い。下頸枝の後傾は弱い（下頸枝角 117° ）。下頸角の外弯は弱い。翼突筋粗面・咬筋粗面は弱い。角前切痕は弱い。筋突起の基部は広く、先端は鈍である。下頸頭は小さい。下頸切痕は広く浅い。歯槽部の萎縮はみられない。歯槽中の下顎歯は13個あり（7-1, 1-3-7）、8-8は未萌出である。歯の咬耗度はMartinの1度であり、歯石はわずかにみられ、う齒はない。

上肢骨：鎖骨の胸骨端、肩甲骨の内側線の骨核は分離するが、上腕骨の近位端、桡骨、尺骨の遠位端の各骨端は癒着を開始している。肩甲骨の肩峰端の骨核、上腕骨の遠位骨端、桡骨、尺骨の近位骨端、中手骨の頭・底などはいずれも体部と癒着完了している。これらの長幹骨は細く、華奢である。上腕骨の鈎状窩と滑車窓は非薄で、両者は連結して滑車上孔を形成している。

下肢骨：下肢骨の骨端の癒着程度をみると、寛骨の右耳状面の骨核は分離するが、左耳状面、坐骨結節、大腿骨の近・遠位端、胫骨の近位端、腓骨の近・遠位骨端は癒着を始めている。寛骨の腸骨・恥骨・坐骨の3骨の体部、大腿骨の大・小転子、胫骨の遠位骨端、中足骨の頭・底はいずれも癒着完了している。大坐骨切痕は広い。恥骨下枝は細く弓状である。閉鎖孔は純円三角形で、前・後の閉鎖結節は強い。大腿骨の粗線は弱い。殿筋粗面は弱く、転子窩は深い。胫骨後面のヒラメ筋線は弱く、鉛直線は強く骨幹中央部で消失している。下肢骨には蹲面が認められる。

体幹骨：椎骨の棘突起先端の骨核、胸骨柄と胸骨体は完全に分離、椎骨の上・下面の骨核、肋骨頭、胸骨の鎖骨切痕の骨核は癒着を開始し椎体と椎弓は癒着完了している。第5号-B人骨の年令は蝶後頭軟骨結合、下頸結合の癒着、骨端線の消失部位、上・下顎の第三大臼歯の未萌出、歯槽中の歯の咬耗度、恵骨結合面の形態から、青年期の人骨である。また、諸骨は比較的小さく、筋付着部は平滑で女性骨である。左大腿骨最大長399mmから、推定身長は150cmである。

3) 第5号-C人骨 出土位置：玄室の北壁寄りで、第5号-A人骨の下脛骨および足根骨周辺の床面上に散乱している。頭位：不明。 体位：不明。 出土状態：頭蓋骨（図版8）、頸椎1個（環椎2片）、胸椎1個（椎弓）、右鎖骨、右腸骨、左右大腿骨、右胫骨が出土している。

人骨所見 主要頭蓋結合の癒着：内・外板ともみられない。縫合骨は左ラムダ縫合に3個ある。

上面観

：類楔形で、頭蓋長幅示数は80.1の短頭型である。頭頂結節の膨隆は強い。

側面観

：頭蓋長高示数は70.2の中頭型である。頭頂骨に比べ前頭骨は小さく、前頭骨の輪郭線の屈曲は強い。眉間の膨隆は弱い（Brocaの0度）。頭頂骨の輪郭線は前半弱く凹窠している。後頭平面の膨隆は強い。上・下側頭線は不明瞭である。外耳孔は右で円形、左で梢円形である。乳様突起はとくに小さい。

底面観

：後頭骨は底部、左右外側部、後頭鱗部とに三分割している。大後頭孔は卵円形、後頭頸の骨核は分離している。頸窩は浅く、頸管は各1個、舌下神経管は左右各1個、蝶後頭軟骨結合は分離している。乳突切痕、後頭動脈溝は浅い。下頸窩は浅く、闊筋結節は弱い。口蓋は放物線状である。横口蓋縫合は波状である。正中口蓋縫合部は前半部でわずかに隆起している。

後面観

：類楔形で頭蓋高示数は80.6の平頭型である。後頭平面は丸く膨隆し、項平面は比較的平坦であり、両平面の屈曲は強い。外後頭結節の膨隆は弱い（Brocaの0~1度）。

顔面観

：コルマンの上顔面示数は53.8の中型、ウイリヒヨウの上顔面示数は69.9の低型である。鼻類示数は108.2の鼻根中型である。前頭縫合は鼻根部に約1mm残存する。前頭結節は強い。眉間・眉弓は弱い。鼻根は比較的広く、前頭骨鼻骨突起の表面は平坦である。梨状口下縫合は鈍な乳児型である。右眼窩口は円形、右眼窩示数は84.8の中型である。右眼窩下縫合は癒着未完了。頬骨は左右とも正常形で、縫合結節は弱い。右眼窩上孔は欠除するが、右前頭切痕は存在する。上顎歯槽示数は132.3の広型である。歯槽中に残存する上顎歯は5個。d、eは萌出しているが、e、fの咬耗はない。

下顎骨

：下顎骨は右の下顎枝と、左の下顎体・下顎枝があり、正中部は欠損している。オトガイ下切痕は不明であるが角前切痕はあり、下顎体・枝とも小さい。左筋突起の基部は比較的広く、先端は鋭利である。下顎切痕は比較的深い。下顎頭は小さい。下顎枝角は下顎枝最小高を軸として推定すると138°で、下顎枝の後傾は強い。e部の歯槽の遠心

側に歯冠が齒槽内に露呈している。 上肢骨：右鎖骨は細く、胸骨端は前後に扁平である。 下肢骨：右腸骨、左右大腿骨、右脛骨が出土している。腸骨は他の2骨より分離している。右大脛骨はほぼ完全に残存し、近・遠位骨端、大・小転子は骨幹より分離している。粗線は不明瞭である。骨幹中央部は前後に扁平で、側面観では後方凹窓が強い。脛骨のヒラメ筋線は不明瞭。近位骨端は分離し、骨幹中央横断面は三角形である。 体幹骨：第1頸椎は後正中部と前弓部が欠損し、左右に分離した外側塊（上・下関節窩）および後弓の1個からなる。その他椎弓は6個あり、そのうち1個の椎弓は左右で融合しているが、椎体とは分離している。右肋骨は少なくとも肋骨体が6個あり、肋骨結節・肋骨頭とは分離している。第5号-C人骨の年令は泉門の閉鎖、前頭縫合の癒着、後頭骨の分離、椎弓の左右癒着、下肢骨の大きさ、上・下顎歯の萌出状態より幼年期の人骨と推定するが、性別は不明である。

2. 第15号横穴墓出土人骨

第15号横穴墓の玄室奥の床面より2個体分（15号-A人骨、15号-B人骨と仮称）の人骨が出土している（第15図）。

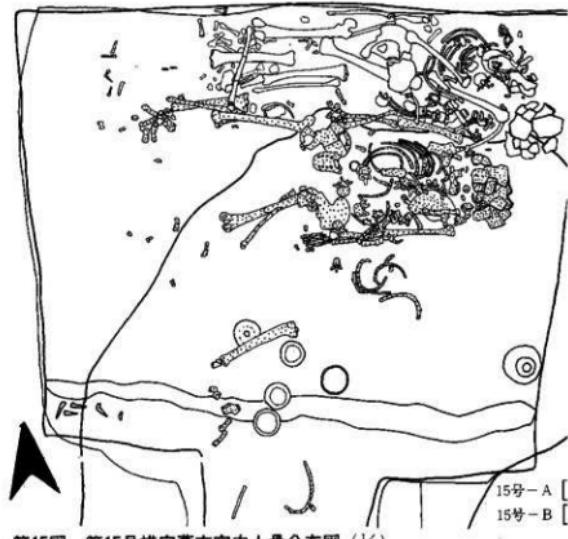
1) 第15号-A人骨 出土位置：玄室奥壁寄りの床面。 頭位：ほぼ東向き。 体位：仰臥位、右上肢伸展位、左上肢屈曲位、左右下肢屈曲位（立膝位？）。 出土状態：ほぼ全身骨が出土している。 色調：黄褐色または褐色を示している。

人骨所見（図版11、13、14） 主要頭蓋縫合の癒着：内板は冠状縫合の角間部、ラムダ縫合が癒着完了している。外板は冠状縫合の泉門部・側頭部にわずかの癒着がある（Martinの1度）。 縫合骨はラムダ縫合（右4個、左2個）、鱗状縫合（右1個、左1個）、ブテリオン部（左翼状骨1個、右正常）。 上面觀：類楔形であり、頭蓋長幅示数は86.2の過短頭型である。頭頂骨は大きく、頭頂結節は強い。 側面觀：頭蓋長高示数は77.3の高頭型である。前頭骨は全体として膨隆弱く、頭頂骨は全体に弧状で、後頭骨の後頭平面・項平面は全体に膨隆している。上・下側頭線は強い。頸骨弓は短かく太い。外耳孔は梢円形である。乳突上稜は強い。乳様突起は破損するが、その根部は太い。

底面觀：大後頭孔は大きく円形、頸窓は深く、頸管は中等度である。舌下神経管の左は不完全に2分し、右は破損不明。下顎窓は深い。

口蓋はU字形で深い。口蓋示数は78.9の長型である。横口蓋縫合は直線状である。矢状口蓋隆起は弱い。切歯縫合はわずかに残存する。 後面觀：砲弾形である。

頭蓋幅高示数は89.7の平頭型である。側頭骨および頭頂骨の輪郭膨隆は強く、後頭骨の膨隆は強い。外後頭結節の突出は中等度（Brockの3度）。 顔面觀：コルマンの上面示数は53.2の中型である。前頭骨の屈曲は弱く、前頭結節は弱い。眉間の膨隆は強く、



第15図 第15号横穴墓玄室内人骨分布図 (%)

(Broca の 3 度)、眉弓は強い。眉上窩は深い。眼窓上縁には右で眼窓上孔・前頭切痕が各 1 個、左で眼窓切痕・前頭切痕が各 1 個みられる。鼻骨は狭く、梨状口は卵円形で、前鼻棘は強い (Broca の 3 度)。頬骨は大きく二分類骨でない。上顎歯槽示数は 121.8 の広型である。上顎骨歯槽突起の萎縮はなく、少なくとも 1 本萌出である。I₂ 部の歯槽舌側は遠心側へ回転している。歯槽中の永久歯は 9 本 (6~3, 1~7) あり、それらの歯の咬耗度は 1~2 度である。歯石はわずかにあり、う歯はみられない。

下顎骨：下顎体は厚く高い。オトガイ切痕は強く、オトガイ隆起は強い。オトガイ孔は左右とも P₂ 部直下に位置する。オトガイ棘は中等度で、舌下腺窩・顎下腺窩は深い。顎舌骨筋線は強い。下顎隆起は舌側歯槽部の I₃ 部と I₅ 部の 2 篇所みられる。下顎角は強く外弯している。角前切痕は強い。翼尖筋粗面は粗粒である。筋突起の基部は広く、先端は鈍である。下顎切痕は広く浅い。前部の歯槽は委縮している。歯槽中に残存する永久歯は 13 本 (8~5, 3, 1~8) あり、その咬耗度は Martin の 1~2 度であり、左右の M₃ は完全に萌出し、歯冠の磨耗がわずかにみられる (Martin の 1 度)。

上肢骨：上肢骨の骨端は癒着完了している。鎖骨は両端とも大きく、肋鎖綱帯症は膨隆し、円錐綱帯結節は下方に膨隆している。肩甲骨は大きく、関節窩は大きい。上腕骨は長く太い。三角筋粗面は広く粗粒である。尺骨・桡骨はいずれも長く太い。尺骨の回外筋線稜は強く、桡骨粗面は大きい。

下肢骨：下肢骨の骨端は癒着完了している。寛骨は大きい。大坐骨切痕は狭く、恥骨下枝は太い。恥骨結合面の凹凸は少ない。閉鎖孔は純円三角形である。大腿骨は長く太い。粗線は強く、殿筋粗面は粗粒である。上骨幹断面示数は 84.2 の広型である。内転筋結節は強い。胫骨は長く太い。胫骨後面のヒラメ筋線は強く、鉛直線は骨幹中央部に達している。胫示数は 61.8 の平頭である。これらの下肢骨には蹠蹠面がみられる。

体幹骨：下位胸椎には肋骨窩の辺縁にわずかの骨増殖がみられる。仙骨前面の弯曲が強い。仙骨管破裂がみられる。以上の所見より、第 15 号 - A 人骨の年令は頭蓋縫合の癒着、下顎骨の第三大臼歯の咬耗度、上・下肢骨などの骨端線の消失から老年期であり、性別は各骨とも大きく、筋付着部も粗粒であること、眉間・眉弓の膨隆が強いこと、寛骨の大坐骨切痕が狭いこと、仙骨前面の弯曲が強いことから男性骨である。左大脛骨最大長 440mm から、推定身長は 164cm である。

2) 第 15 号 - B 人骨 出土位置：第 15 号 - A 人骨の漢門側の床面。 調位：ほぼ東向き。 体位：仰臥位、左右上肢伸展位、右下肢伸展位、左下肢伸展位？。 出土状態：ほぼ全身骨が出土している (図版 9、14)。

色調：黄褐色または褐色を示している。

人骨所見 主要頭蓋縫合の癒着：内板の癒着は完了している。冠状縫合の蝶門部・角間部・側頭部・ラムダ縫合の中央部の各外板はわずかに癒着している (Martin の 1 度)。縫合骨はラムダ縫合の右中央部に 1 本みられる。

上面觀：類五角形で、頭蓋長幅示数は 82.4 の短頭型である。頭頂骨は大きく、頭頂結節は強い。

側面觀：頭蓋長高示数は 73.9 の中頭型である。前頭骨の膨隆は弱い。後頭骨は後頭平面・項平面とともに全体に膨隆している。上・下側頭線は強く、側頭平面は広い。側頭骨は高く広い。頬骨弓はやや細く直線状である。外耳孔は梢円形で、外耳道上棘は強く、乳様突起は大きい。

下面觀：大後頭孔は梢円形である。舌下神経管は左右とも 1 例である。乳突切痕・後頭動脈溝は深い。下顎窩は深い。口蓋は梢円形で深い。口蓋示数は 78.9 の長型である。後鼻棘は強い。

後面觀：家形で、頭蓋幅高示数は 87.6 の平頭型である。後頭骨は大きい。上項線は強く、外後頭結節の膨隆は弱い (Broca の 1 度)。

顔面觀：コルマンの上顔面示数は 49.7 の短型、ウイルヒヨウの上顔面示数は 70.8 の低型である。前頭骨は大きい。前頭結節は弱い。眉間の膨隆は強く (Broca の 3 度)、眉弓は強い。眼窓上縁には右で眼窓上孔 1 個ある。鼻骨は中等度の広さである。梨状口は卵円形で、その下縁は鋭利である。鼻示数は 48.1 の中型である。前鼻棘の突出は強い (Broca の 4 度)。眼窓口は類四角形で、眼窓示数は右 72.9 の低型である。上顎骨は大きく、上顎歯槽示数は 117.2 の広型である。上顎の歯槽は 16 例あり、I₂ 部の萎縮がみられる。永久歯 13 本 (8~3, 1~7) の咬耗度は Martin の 1~2 度であり、う歯

はみられないが、歯石は歯冠周囲にみられる。 下頸骨：下頸体は厚い。オトガイ下切痕は弱い。オトガイ孔は左右とも P_2 の直下部にみられる。オトガイ棘は強い。下頸隆起は C_6 部、 T_4 部の2箇所にみられる。下頸角は強く外弯する。角前切痕は強い。歯槽中に残存する永久歯は8個（ $\overline{7}-\overline{3}$ 、 $\overline{5}-\overline{7}$ ）あり、その咬耗度はMartinの1~2度である。う蝕はみられない。

上肢骨：骨端線はすべて消失している。鎖骨は太く、肋鎖輪帶压痕は深く、円錐輪帶結節は大きく下方へ影響する。肩甲骨の関節下結節は強い。上腕骨の骨幹は太く、三角筋粗面は広く粗糲である。尺骨粗面は粗糲で、回外筋線跡は強い。前腕骨の骨間線は強い。

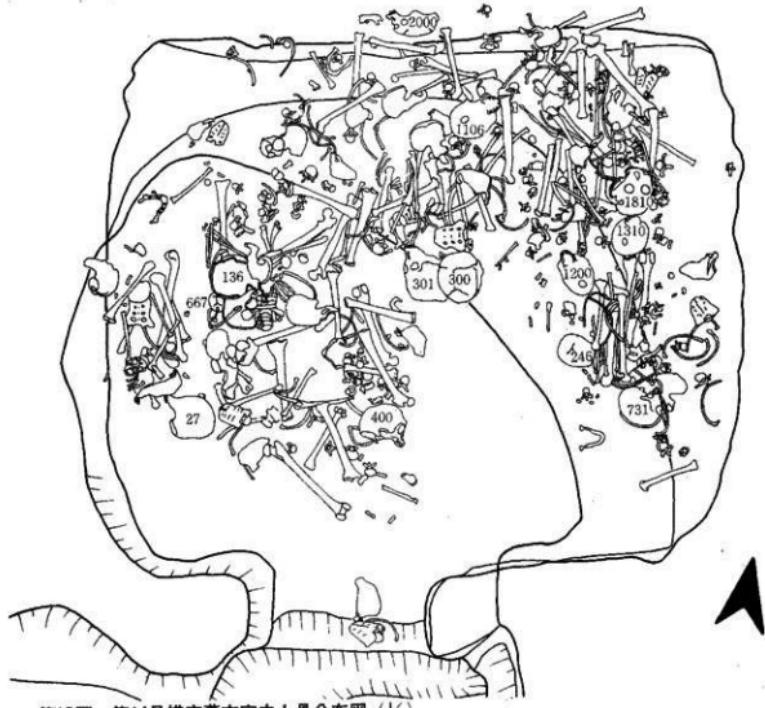
下肢骨：骨端線は消失している。寛骨は広く高い。恥骨下枝は太い。大坐骨切痕は狭い。大腿骨の殿筋粗面は粗糲で稜状に膨隆する。上骨幹断面が数は90.0の中型である。内転筋線は強い。脛骨後面のヒラメ筋線は強く、船直線は骨幹中央部に達する。脛示数は67.7の中胫である。腓骨の骨幹は太い。下肢骨にはいわゆる風習による小関節延長面がみられる。

体幹骨：胸骨の胸骨体は胸骨柄と分離している。仙骨は狭く長い。仙骨前面の弯曲は強い。以上の所見より、第15号—B人骨の年令は頭蓋縫合の癒着、第三大臼歯の萌出、上・下肢骨の骨端線の癒着消失により老年期であり、性別は眉間の膨隆が強く、側頭骨乳様突起が大きい。各骨とも筋附着部が粗糲で頑丈であり、寛骨の大坐骨切痕が強いことから男性骨である。左大腿骨最大長は420mmで、推定身長は160cmである。

3. 第14号横穴墓出土人骨

出土位置：床面全域に分布（第16図）。

頭位・体位：各人骨は生理的自然位を保っていない。散乱状態で出



第16図 第14号横穴墓玄室内人骨分布図 (1/2)

土しているので、人骨の出土状態から頭位・体位は不明である。 出土状態：ほぼ全身骨が出土するが、その種別の個体数は腐蝕か、あるいは何らかの機序によって欠失している。残存数は右第二中足骨の2個体の最少数より、右上腕骨の14個体と変動している。10個体以上の種別を列記すると以下のようなである。頭蓋13個、下顎骨13個、肩甲骨（右11個、左11個）、上腕骨（右14個、左12個）、肱骨（右13個、左13個）、尺骨（右13個、左12個）、骨（右12個、左13個）、大腿骨（右13個、左13個）、胫骨（右11個、左13個）、腓骨（右11個、左11個）、距骨（右10個）、踵骨（左12個）、第二中足骨（左11個）、第四中足骨（左10個）、第五中足骨（右10個）、第一頸椎10個、第二頸椎10個である。 色調：黄褐色から褐色である。

人骨所見 頭蓋、下顎骨、上腕骨、骨、大腿骨の順に所見を述べる。ただし、左右側のある骨の形態はほぼ類似しているので、原則として左を記載する。また、散乱出土人骨には〔〕内に出土番号を付して区別した。

頭蓋：13個〔136、731、301、1810、400、27、2000、1200、1106、1310、300、246、667〕出土している。 頭蓋〔667〕：骨質は薄いが、とくにブレグマ部、ラムダ部で薄く、これらの部位の縫合線は不明瞭である。前頭縫合は鼻根部にわずかに残る。眼窩下孔は左右とも1個ある。

頭蓋〔246〕：骨質はやや厚く、ブレグマ部、ラムダ部の縫合は形成されている。 頭蓋〔300〕：後頭骨の外側部と底部は融合しているが、後頭鱗や蝶形骨体とは分離している、眼窩下縫合の癒着は未完了で、切歯縫合は1/3残存している。ラムダ縫合には縫合骨がある。上顎の歯槽は12個〔6部～6部〕あり、乳歯4個〔1、1、1、1〕の咬耗度はわずかである（Martinの1度）。 頭蓋〔1310〕：後頭鱗は後頭骨外側部と融合する。頭蓋水平幅は49.3mmで、頭蓋長幅示数は77.5の中頭型、頭蓋長高示数は69.4の低頭型、頭蓋幅高示数は89.6の平頭型である。上顎の歯槽は10個〔7部～1部、1部、5部〕あり、乳歯2個〔1、1〕と永久歯2個〔1、1〕の咬耗度はわずかである（Martinの1度）。7は歯冠のみ形成、1は生の近心下部にありその根は約1/2形成している。

頭蓋〔1106〕：後頭顎の骨核は分離している。頭蓋骨の骨質は厚い。縫合骨はラムダ縫合にある。頸骨は左右とも二分頸骨である。口蓋には紡錘状の矢状口蓋降起がある。 上顎の曲槽は14個〔7部～7部〕あり、5部の周囲には乳歯の歯根3個残存している。歯槽中の乳歯は1個〔1〕、永久歯は6個〔1、1、1、1、1、1〕あり、そのうち1、3、3、1、1の咬耗度はMartinの1度で、1、1は未萌出である。

頭蓋〔1200〕：後頭顎の骨核は癒着完了している。 上顎の歯槽は15個〔8部～7部〕

あり、永久歯3個〔1、1、1〕の咬耗度はMartinの1度である。 頭蓋〔27〕：蝶形頭軟骨結合は癒着完了するが、頭蓋縫合の癒着は内・外板ともみられない。ラムダ縫合の左中央部には小縫合骨1個ある。上面観は類正角形で、頭蓋長幅示数は72.9の長頭型、頭蓋長高示数は75.1の高頭型である。側頭平面は広くその膨隆は少ない。不完全な側頭骨前頭突起が左右のブテリオン部にみられる。外耳孔は楕円形である。乳様突起はやや大きい。大後頭孔は円形である。口蓋は深く紡錘状の矢状口蓋降起がみられる。後頭観は家形で、頭蓋幅高示数は103.0の尖頭形である。外後頭結節の膨隆度はBrocaの2度である。コルマンの上顎面示数は54.4の中頭型である。上顎の歯槽は11個〔6部～5部〕あり、永久歯6個〔1、1、1、1、1、1〕の咬耗度はMartinの1度であり、歯石は歯冠周囲にわずかに付着している。

頭蓋〔2000〕(図版8)：主要頭蓋縫合の癒着は内・外板ともみられない。上面観は卵円形で、頭蓋長幅示数は72.9の長頭型、頭蓋長高示数は75.1の高頭型、頭蓋幅高示数は103.0の尖頭形である。外耳孔は楕円形である。乳様突起は小さい。上・下側頭線は弱い。外後頭結節の膨隆は弱い(Brocaの1度)、眉間の膨隆度はBrocaの2度である。頸骨は左右とも二分頸骨である。上顎の歯槽は15個〔7部～8部〕あり、5部の周囲には乳歯の歯根が残存し、上部の歯槽は5部の頸側へ移動している。永久歯6個〔1、1、1、1、1、1〕の咬耗度はMartinの1～2度である。 頭蓋〔400〕(図版8)：主要頭蓋縫合の癒着は内・外板ともみられない。上面観は卵円形で、頭蓋長幅示数は71.7の長頭型、頭蓋長高示数は75.1の高頭型である。

高示数は73.8の中頭型、頭蓋幅高示数は103.0の尖頭型である。頭蓋水平周は521mmである。眉間の膨隆度はBrocaの4度である。上・下側頭線は強い。外耳孔は橢円形である。乳様突起は大きい。大後頭孔は卵円形である。口蓋示数は80.0の中型である。矢状口蓋隆起がみられる。コルマンの上顎面示数は51.1の中型である。上頸線は強く、外後頭結節の膨隆度はBrocaの3度である。類骨の縁突起は左右とも強くいずれも二分類骨である。上顎の歯槽は15個(5部～7部)あり、永久歯1個(5)の咬耗度はMartinの3度である。

頭蓋 [1810] (図版8)：主要頭蓋縫合の癒着は内・外板ともみられない。上面観は卵円形で、頭蓋長幅示数は73.1の長頭型、頭蓋長高示数は71.4の中頭型、頭蓋幅高示数は97.7の中頭型である。眉間の膨隆度はBrocaの3度である。上・下側頭線は強い。翼状骨が右ブテリオン部にみられる。乳様突起は大きい。口蓋示数は、78.8の長型で、矢状口蓋隆起がみられる。コルマンの上顎面示数は51.1の中型である。最上・上頸線は強く、外後頭結節の膨隆度はBrocaの3度である。類骨の縁突起は強く、後裂がみられる。上顎の歯槽は16個あり、5部～6部は萎縮している。永久歯7個(5、4、3～6)の咬耗度はMartinの2度である。 **頭蓋**

[301] (図版8)：主要頭蓋縫合の癒着は冠状縫合の角間部、側頭部および矢状縫合の頂溝部、頭頂孔間部の外板で癒着開始している(Martinの1度)。上面観は卵円形で、頭蓋長幅示数は73.3の長頭型、頭蓋長高示数は72.7の中頭型、頭蓋幅高示数は99.3の尖頭型である。眉間の膨隆はBrocaの4度である。頭蓋水平周は525mmである。後頭平面は膨隆し、項平面は平坦である。ブテリオン部は左右とも正常型である。乳様突起は大きい。矢状口蓋隆起がみられる。後面観は家形である。上頸線は強く、外後頭結節の膨隆度はBrocaの3度である。後裂が右類骨にある。上顎の歯槽は16個あり、5部、6部、5部～8部は萎縮している。永久歯5個(7、6、3、2、1)の咬耗度はMartinの2～3度で、5はう蝕している。 **頭蓋 [731]** (図版8)

：主要頭蓋縫合の癒着は冠状縫合の角間部、側頭部および矢状縫合の頂溝部の外板で癒着開始している(Martinの1度)。上面観は卵円形で、頭蓋長幅示数は69.0の過長頭型、頭蓋長高示数は75.5の高頭型、頭蓋幅高示数は109.4の尖頭型である。頭蓋水平周は508mmである。眉間の膨隆度はBrocaの3度である。乳様突起は大きい。不完全な側頭骨前頭突起が左右のブテオノン部にみられる。口蓋は深くU字形で、矢状口蓋隆起がみられる。最上・上頸線は強く、外後頭結節の膨隆度はBrocaの3度である。上顎の歯槽は16個あり、5部が萎縮している。5部・7部には乳齒の歯槽が残存している。 **頭蓋 [136]**：主要頭蓋縫合の癒着は矢状縫合の頂溝部(Martinの3度)、頭頂孔間部(2度)および冠状縫合、ラムダ縫合の各部外板で認められる。眉間の膨隆度はBrocaの3度である。上・下側頭線は強く、乳様突起は大きい。矢状口蓋隆起がみられる。最上・上頸線は強く、外後頭結節の膨隆度はBrocaの4度である。上顎の歯槽は14個(6部～8部)あり、5部～8部の歯槽は萎縮している。永久歯3個(4、3、5)の咬耗度はMartinの3度であり、う蝕ではなく、歯石は歯冠周囲が多い。

下顎骨：13個〔178、209、1078、1811、579、56、481、1700、1934、95、1043、738、512〕出土している(図版10、11)。そのうち、5個〔178、209、1078、1811、579〕の左右の第三大臼歯は萌出し、いずれも頸歯である。 **上腕骨右**：14個〔166、210、357、1630、373、89、419、787、1573、1821、1430、1055、724、126〕出土している(図版15)。そのうち、6個〔126、1724、1055、1430、1821、1573〕は遠・近位骨端とも骨幹より分離している。3個〔787、419、89〕の遠位骨端は癒着完了するが、その近位骨端は骨幹より分離している。他の5個は両骨端とも癒着完了している。 **対骨左**：13個出土している(図版16)。そのうち、4個〔659、245、1484、1637〕の腸骨、恥骨、坐骨の各体部は互いに分離している。2個〔1472、1928〕の恥骨枝と坐骨枝のみが癒着している。1個〔182〕の恥骨体、腸骨体、坐骨体は癒着完了、坐骨結節の癒着開始、腸骨枝の骨核分離がみられる。1個〔79〕の腸骨枝に骨端線が残存している。他の5個はすべて

癒着完了している。また、腸骨体、恥骨体、坐骨体が癒着完了している7個のうち、2個〔1305、79〕の大坐骨切痕は広く、5個〔147、310、1674、110、182〕のそれは狭い。**大腿骨左：**13個出土している(図版15)。そのうち、6個〔670、788、478、1760、302、1482〕は近・遠位骨端とともに骨幹より分離している。1個〔404〕の近位骨端、大・小転子は癒着開始している。その他の6個〔37、380、1676、1523、756、179〕は両骨端とも癒着完了している。第14号人骨のうち、上腕骨右は14個体分ある。この散乱人骨群の年令構成について、骨端・骨核の出現と癒着、不動連結部の癒着、歯の出現と萌出、磨耗から、性別について推定年令に相当する骨の大きさ、形状、乳様突起の大きさ、眉間・外後頭結節の膨隆度、寛骨の大坐骨切痕の形態などから判断すると、熟年男性骨3個体、熟年女性骨1個体、壮年男性骨1個体、青年男性骨1個体、青年女性骨1個体、および性別不明の7個体(青年期人骨1個体、少年期人骨4個体、幼年期人骨2個体)、合計14個体と推定する。

4. 第16号横穴墓出土人骨

出土位置：玄室の奥壁近くの床面より出土している。
頭位・体位：玄室の北隅の床面上直上より左側の前腕骨、手根骨、中手骨、指骨が生理的自然位を保って出土し、手背を床面側、手掌を表層に向いているが、その他の人骨は散乱状態で出土しており、頭位・体位は不明である。
出土状態：ほぼ全身骨が出土している。頭蓋、下顎骨、肩甲骨左右、鎖骨左、上腕骨左右、桡骨左右、尺骨左右、舟状骨左、月状骨右、有鈎骨左、第一・中手骨左、第四・第五中手骨右、寛骨左右、大脛骨左右、胫骨右、膝蓋骨右、踵骨左右、足の舟状骨左、内側楔状骨左、外側楔状骨右、立方骨右、第二・中足骨左、第三・四・五中足骨右、第一・二頸椎、仙骨、胸骨柄、第一肋骨右はいずれも4個である。

色調：黄褐色～褐色である。

人骨所見 頭蓋は4個〔179、111、112、230〕出土している(図版9、10)。左右の第3大臼歯は頭蓋〔112〕、〔230〕とも未萌出である。蝶後頭軟骨結合は頭蓋〔230〕で分離するが、他の3頭蓋は癒着が完了している。主要頭蓋縫合は4個の頭蓋骨内・外板とも癒着がない。

頭蓋 (179) 上面觀

観：頭蓋長高示数は70.7の中頭型である。後頭平面と項平面はいずれも膨隆している。ブテリオン部には左右と



第17図 第16号・第17号横穴墓玄室内人骨分布図 (1/20)

も翼状骨各1個あり、鱗状縫合左の頭頂切痕部には小さな縫合骨が1個ある。外耳孔は卵円形である。乳様突起は大きい。
底面觀：大後頭孔は梢円形である。舌下神経管は右で1個、左で2個に分かれている。口蓋は深く梢円形であり、口蓋示数は72.4の長型である。
上項線はやや強く、外後頭結節はBrocaの2度である。
上頸線はやや強く、外後頭結節はBrocaの2度である。
眼窩上縁には左右とも眼窩上孔、前頭切痕が各1個ある。鼻骨は狭い。鼻示数は53.1の低型である。梨状口は卵円形である。前鼻棘は強い。眼窩口は鈍円四角形で、眼窩示数は83.3の中型である。眼窩下縫合の歯着は左右とも半に達している。頬骨には前・後裂はない。上顎歯槽示数は105.0の長型である。上顎の歯槽は16個（Ⅲ部～Ⅳ部）あり、歯槽の萎縮がみられない。永久歯は11個（Ⅱ部～Ⅲ部、Ⅳ部、Ⅴ部～Ⅶ部）あり、その咬耗度はMartinの1～2度であり、1個（Ⅳ部）にはう蝕がみられ、歯冠周囲には歯石が多く付着している。

頭蓋【111】
上面觀：類五角形で、頭蓋長幅示数は78.9の中頭型である。頭頂結節は強い。前頭結節は強い。
側面觀：頭蓋長高示数は73.7の中頭型である。アテリオン部は左右とも正常である。外耳孔は梢円形である。乳突上稜、乳突上溝は深く、乳様突起は小さい。
底面觀：大後頭孔は卵円形で、舌下神経管は左右とも各1個ある。下顎窩は深い。
後面觀：砲弾形で、頭蓋幅高示数は94.5の中頭型である。外後頭結節の膨隆は弱い（Brocaの0度）。
顔面觀：コルマンの上顎面示数は51.6の中型、ウイルヒョウの上顎面示数は71.7の低型である。眉間の膨隆はBrocaの2度である。眼窩上縁には左右とも眼窩切痕、前頭切痕がみられる。鼻骨は狭い。鼻示数は50.0の中型である。前鼻棘は強い。眼窩口は鈍円四角形で、眼窩示数は78.6の中型である。頬骨の歯突起は左右とも強い。左右とも後裂がみられる。上顎歯槽示数は117.0の広型である。上顎の歯槽16個（Ⅲ部～Ⅳ部）のうち、Ⅲ部、Ⅳ部、Ⅴ部の歯槽は萎縮している。歯槽中に丁植の歯はみられない。

頭蓋【112】
頭頂結節は強い。アテリオン部は右で正常であり、左で翼状骨1個ある。外耳孔は倒卵円形であり、左右とも前後壁は膨隆し、外耳道右は左より狭い。乳突上稜、乳突上溝は浅い。乳様突起は小さい。下顎窩は浅い。口蓋は深いが、口蓋降起はみられない。外後頭結節の膨隆度はBrocaの1度である。眉間、眉弓の膨隆は弱い。頬骨の歯突起は強く、右で後裂はみられるが、左ではみられない。上顎の歯槽は14個（Ⅲ部～Ⅴ部）あり、永久歯5個（Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ）の咬耗度はMartinの1度であり、う蝕はなく歯石がわずかに歯冠周囲に付着する。

頭蓋【230】
頭蓋は小さく、骨質は薄い。前頭縫合は鼻根部に痕跡的に残存する。前頭結節は強く、頭頂結節は弱い。アテリオン部は左右とも側頭骨前頭突起がみられる。口蓋は深く欠状口蓋降起がみられる。後頭平面と項平面は全体に膨隆し、外後頭結節の膨隆はみられない（Brocaの0度）。眉間の膨隆は弱い（Brocaの1度）。上顎の歯槽は14個（Ⅱ部～Ⅴ部）あり、永久歯2個（Ⅳ、Ⅴ）の咬耗度はMartinの1度である。

下顎骨は4個〔125、465、205、238〕出土している（図版11）。下顎骨〔238〕は左右の第3大臼歯とも未萌出である。また下顎骨〔205〕、〔238〕はともに下顎結合の歯着未了である。

下顎骨【125】
下顎体は中等度の大きさである。オトガイ下切痕は強い。オトガイ結節、オトガイ隆起は弱い。頸下腺窩は深い。下顎隆起は弓部舌側歯槽とⅢ～Ⅴ間に各1個みられる。下顎角の外弯は中等度で、角前切痕は弱い。下顎切痕は深い。下顎の歯槽は16個（Ⅲ部～Ⅴ部）あり、萎縮はみられない。永久歯9個（Ⅲ～Ⅴ、Ⅶ～Ⅸ）の咬耗度はMartinの1～2度であり、う蝕はみられないが、歯冠周囲には歯石が多く付着する。

下顎骨【465】
下顎体は薄い。オトガイ下切痕は弱い。オトガイ隆起、オトガイ結節はともに弱い。オトガイ孔は左右ともⅣ直下に位置する。頸下腺窩は浅い。下顎隆起は左右ともⅣ部の舌側歯槽部にみられる。下顎角は外弯し、角前切痕は強い。下顎の歯槽は16個（Ⅲ部～Ⅴ部）あり、Ⅳ部の歯槽は萎縮している。永久歯は6個（Ⅲ～Ⅴ、

〔5、〔6〕、〔8〕）あり、その咬耗度はMartinの1～2度であり、〔6〕、〔6〕の2個にはう蝕を認め、歯石の付着は少ない。

下顎骨〔205〕、下顎骨〔238〕 オトガイ切痕は強い。オトガイ孔は左右ともP₁、P₂の直下に位置する。下顎角の外弯は弱く、角前切痕はみられない。翼突筋粗面も弱い。筋突起先端は鈍であり、下顎切痕は広く浅い。下顎骨〔205〕の歯槽は16個（〔8部～〕〔8部〕）あり、永久歯6個（〔6〕、〔3〕、〔2〕、〔3〕、〔6〕、〔7〕）の咬耗度はMartinの1度で、う蝕はみられないが、歯石は歯冠周囲にわずかに付着する。下顎骨〔238〕の歯槽は14個（〔7部～〕〔7部〕）あり、永久歯4個（〔7〕、〔6〕、〔6〕、〔7〕）の咬耗度はMartinの1度で、〔7〕にはう蝕がみられ歯石の付着がない。

上腕骨左は4個〔311、184、456、389〕出土している（図版12）。上腕骨〔389〕は近・遠位骨端とも骨幹より遊離し、上腕骨〔456〕の近位端は遊離するが、遠位端は癒着完了している。上腕骨〔184〕、〔311〕は両骨端とも癒着完了している。上腕骨〔311〕は長く、骨幹は太い。三角筋粗面は広く粗陋である。上腕骨〔184〕は上腕骨〔456〕より細く、骨幹も短い。上腕骨〔389〕は鈎状突起と肘頭窩とが連なっている。

寛骨左は4個〔200、231、256、201〕出土している（図版12）。寛骨〔201〕は恥骨枝と坐骨枝とが癒着完了するが、腸骨体は遊離する。寛骨〔256〕の腸骨、恥骨、坐骨と上前腸骨棘の骨核は腸骨翼といずれも癒着完了するが、坐骨結節にはなお骨端線が残存する。また、恥骨結合面には平行で規則的な数本の縦と溝がみられる。寛骨〔200〕は腸骨棘に骨端線の痕跡があり、恥骨結合面に浅い3本の横筋がみられる。寛骨〔231〕の全骨端線は消失し、恥骨結合面には不規則な浅い凹凸があり坐骨結節、仙骨結節や連結面の辺縁に骨増殖がみられる。大坐骨切痕は広く、恥骨枝は凹曲し、寛骨臼は深い。寛骨〔200〕の大坐骨切痕は狭く、恥骨枝は太く直線状、寛骨臼は大きく浅い。寛骨〔256〕の寛骨臼は大きく、恥骨枝は太く直線的である。

大腿骨左は4個〔207、484、457、241〕出土している（図版13）。大腿骨〔241〕では遠・近位骨端および大・小転子とも骨幹より遊離している。大腿骨〔457〕の遠位骨端は遊離するが、近位骨端線はほとんど消失し、大・小転子は完全に骨体と癒着している。大腿骨〔207〕の遠位骨端線はほとんど消失する。大腿骨〔484〕は完全癒着している。

大腿骨〔484〕の殿筋粗面は高い隆起をなし、転子窓陥凹は強い。粗線も発達するが柱状でない。**大腿骨〔207〕**の殿筋粗面は粗糙であり、転子下窓は浅い。以上の所見より第16号人骨の個体数は31種（左右を別種と考えると39種）の人骨でいずれも4個宛あり、性や加令に伴う形態的特徴は左右側でよく類似している。すなわち、この人骨群の年令および性別の構成について、骨端・骨核の出現と癒着、不動連結部の癒着、歯の形成と萌出、磨耗度から、性別について推定年令に相当する骨の大きさ、形状、眉間、側頭骨乳様突起、外後頭結節の膨隆度、寛骨の大坐骨切痕の形態などから、熟年期女性骨1個体、壮年期男性骨1個体、青年期女性骨1個体、少年期の性別不明人骨1個体の合計4個体と推定する。

5. 第17号横穴墓出土人骨

出土位置：玄室および羨門部に分布する（第17図）。
頭位・体位：各人骨は散乱状態で出土しており、人骨の出土状態から頭位・体位は不明である。
出土状態：ほぼ全身骨が出土し、そのうち頭蓋、下顎骨、鎖骨左右、肩甲骨右、上腕骨左右、桡骨右、尺骨右、寛骨左右、大腿骨左右、外側楔状骨左、第四中足骨左、第二頸椎、胸骨、第一肋骨左右はいずれも3個である。
色調：黄白色～褐色である。

人骨所見 頭蓋は3個〔190、210、219〕である。蝶後頭軟骨結合は、頭蓋3個とも癒着完了している。主要頭蓋縫合は、額縫〔190〕の内・外板とともに癒着がない。額縫〔219〕の外板は癒着がない。しかし内板はラムダ縫合の角間部（Martinの2度）、矢状縫合の頭頂孔間部（Martinの1度）に癒着がある。頭蓋〔210〕の外板は冠状縫合のプレグマ部・角間部（Martinの1度）、矢状縫合のプレグマ部（Martinの2度）、頂溝部・頭頂孔間部・三角部（Martinの1度）、ラムダ縫合のラムダ部・中央部（Martinの1度）に癒着がある。

頭蓋 [219] (図版10) 上面観：類五角形で、頭蓋長幅示数は72.7の長頭型である。側面観

：頭蓋長高示数は74.3の中頭型である。頭頂結節は強い。眉間の膨隆度はBrocaの2度である。アテリオン部は左右とも正常。外耳孔は倒卵円形で、外耳道骨瘤は左右ともみられない。側頭骨乳様突起は大きい。底面観：大後頭孔は円形である。舌下神経管は左右とも1個ある。乳突切痕、後頭動脈溝は深い。口蓋は深く、矢状口蓋隆起は弱い。

後面観：家形で頭蓋幅高示数は102.2の尖頭型である。上頸線は弱いが、外後頭結節の膨隆は強い(Brocaの3度)

顔面観：コルマンの上顎面示数は51.2の中型である。眼窓上縁には左右とも眞窓上孔と前頭切痕が各1個ある。鼻示数は50.0の中型である。鼻骨は狭い。梨状孔は卵円形で、前鼻棘の突出は強い。眼窓口は鈍円四角形で、眼窓示数は82.9の中型である。類骨には前、後裂がみられない。眼窓下縫合は左右とも癒着完了している。上顎の歯槽は15個(8部～7部)、永久歯6個(7, 6, 4～7)、その咬耗度はMartinの2度でう触ではなく、歯冠周間にわずかの歯石がみられる。口蓋示数は81.5の中型、上顎歯槽示数は122.6広型である。

顔蓋 [210] 眉間の膨隆度はBrocaの2度であり、側頭骨乳様突起は小さい。乳突切痕、後頭動脈溝は浅い。外後頭結節の膨隆度はBrocaの2度である。上顎の歯槽14個(7部～7部)の萎縮はなく、永久歯3個(7, 6, 6)の咬耗度はMartinの2度であり、う触ではなく歯冠周間に歯石が多い。口蓋には紡錘状の矢状口蓋隆起がみられる。外耳道の前後壁は左右とも膨隆し、とくに左側の外耳道は骨瘤により狭い。

顔蓋 [190] 眉間の膨隆度はBrocaの3度であり、側頭骨乳様突起は大きい。外後頭結節の膨隆度はBrocaの2度である。上顎の歯槽15個(7部～8部)の萎縮はなく、永久歯7個(7, 6, 4～8)の咬耗度はMartinの1～2度である。

下顎骨 [186] 下顎骨

歯槽上縁は下顎頭と平行である。オトガイ下切痕は強い。オトガイ隆起は弱く、オトガイ結節は強い。顎下腺窩は深い。下顎角は内向し、角前切痕は弱い。3部の舌側歯槽部には小さな下顎隆起1個みられる。下顎の歯槽15個(8部～7部)の萎縮はなく、永久歯4個(7, 6, 6, 7)の咬耗度はMartinの2度であり、う触ではなく歯冠周間に歯石が多く付着する。

下顎骨 [218] 下顎体は厚い。オトガイ下切痕は強い。オトガイ隆起、オトガイ結節は強い。オトガイ棘は強い。翼突筋粗面は粗糙である。角前切痕は弱い。下顎切痕は広く浅い。下顎の歯槽16個(8部～8部)の萎縮はないが、5部の頬側は遠心側へ回転している。永久歯1個(7)の咬耗度はMartinの2度である。

下顎骨 [261] 歯槽上縁は後方に向い低くなる。オトガイ切痕は弱い。オトガイ隆起、オトガイ棘は中等度である。下顎角の外弯は強く、角前切痕は強い。下顎切痕は広く浅い。下顎の歯槽14個(7部～7部)のうち、7部の歯槽は萎縮している。永久歯5個(7, 6, 5～7)の咬耗度はMartinの2～3度であり、う触ではなく歯石の付着は少ない。

上腕骨左は3個(7.9, 2.59, 5.9)出土している(図版13)。いずれも骨端線は消失している。

上腕骨左(7.9)骨幹は太く長い。三角筋粗面は広く粗糙である。次いで上腕骨 [259] は頸尖であり、上腕骨 [5.9] は準者である。

寛骨左は3個(1.57, 2.01, 1.85)出土している(図版13)。

寛骨 [157] の腸骨後には骨端線の痕跡がみられる。寛骨臼は大きく、大坐骨切痕は狭い。

寛骨臼は大きく、大坐骨切痕は狭い。恥骨下枝は太い。恥骨結合面の凹凸は少ない。

寛骨 [201] の腸骨後、坐骨結節はとくに粗糙であり、寛骨臼は小さく、大坐骨切痕は狭い。

寛骨 [185] の腸骨後、坐骨結節はとくに粗糙であり、寛骨臼は小さく、大坐骨切痕は狭い。恥骨下枝は細い。

大腿骨左は3個(2.26, 1.50, 2.60)出土する(図版13)。いずれも骨端線は消失している。

大腿骨 [226] 骨幹は細く長い。

殿筋粗面は丘状に隆起し、その外側下方の転子下窩は浅い。次いで 大腿骨 [150] は長く、骨幹は太い。粗線は広く柱状である。殿筋粗面は粗糙で、転子下窩は深い。

大腿骨 [260] は細く、粗線は広いが柱状でない。

第17号人骨は重複する骨から少なくとも3個体分であり、それらの年令構成は体肢骨の骨端線の消尖、頭蓋縫合の愈着度、上・下顎歯の咬耗度から、性別は各骨の大きさ、筋附着部の強さ、寛骨の大坐骨切痕の形態からみて壮年期男性骨1個体、老年期の男性骨1個体および老年期女性骨1個体の合計3個体と推定する。

お わ り に

富山県高岡市頭川城ヶ平横穴墓群の第II次調査の際、第5号、第14号、第15号、第16号、第17号横穴墓出土人骨について総括する。

- 1) 第5号横穴墓出土人骨3個体：第5号—A人骨、熟年男性骨。第5号—B人骨、青年女性骨。第5号—C人骨、幼年期人骨で性別不明。
- 2) 第15号横穴墓出土人骨2個体：第15号—A人骨、熟年男性骨。第15号—B人骨、熟年男性骨。
- 3) 第5号、第15号横穴墓出土人骨は生理的自然位を保って出土している。
- 4) 第14号横穴墓出土人骨最小限14個体分確認されている。：熟年男性骨3個体。熟年女性骨1個体。壮年男性骨1個体。青年男性骨1個体。青年女性骨1個体および性別不明な青年期人骨1個体。少年期人骨4個体、幼年期人骨2個体。
- 5) 第16号横穴墓出土人骨最小限4個体分確認されている：熟年女性骨1個体。壮年男性骨1個体。青年女性骨1個体。性別不明な少年期人骨1個体。
- 6) 第17号横穴墓出土人骨最小限3個体分確認されている：壮年男性骨1個体。熟年男性骨1個体。熟年女性骨1個体。
- 7) 第14号、第16号、第17号横穴墓出土人骨は散乱状態で出土している。

参 考 文 献

- 城一郎 古墳時代日本人人骨の人類学的研究、人類学雑報、1：1～334、1938。
- Martin, R. & Saller, K. Lehrbuch der Anthropologie, Bd. 1-2, 429-597, 1005-1477, Gustav Fischer. Verlag, Stuttgart.
- 松田健史 石川県鶴来町一閑院近郊より出土せる家形石棺内人骨の形質人類学的研究、金沢大学医学部解剖学教室業績 第62冊、159～190、1960。
- 松田健史 福井県福井市足羽公園より出土せる舟型石棺内人骨の形質人類学的研究、同上誌 第62冊、191～225 1960。
- 松田健史 森沢佐成他 一見古代人骨観を呈する白骨の鑑定例、法医学の実際と研究、23：81～100、1980。
- 森沢佐成 日本古墳人頭蓋形質の地方差について、新潟医会誌 90：32～47、1976。
- 森沢佐成 松田健史他 北陸日本人下顎骨の年齢差について—20才代、30才代、40才代の比較—、人類誌、89：439～456 1981。
- 森沢佐成 北陸日本人下顎骨の男女差について、新潟医会誌、95：669～675、1981。
- 森沢佐成・松田健史 頭川城ヶ平横穴墓群第I次緊急発掘調査概要 10～14、高岡市教育委員会、1983。

V. ま　と　め

前章まで述べたことと、問題点を要約しまとめとする。

1. 頭川城ヶ平横穴墓群は、小矢部川左岸に連なる丘陵の西側斜面に位置し、20基（3基以上消滅）以上の横穴墓により形成され、現在の頭川村落の入口を北限とする範囲に分布する。
2. 横穴墓群は、低地から高地へ4段にわかれ、各段で群を構成する。標高21~23mに始まる第1段に9基（1基消滅）、第2段に6基（2基消滅）、第3段に3基、第4段に2基が各段10~15mの比高差をもって位置し、2基1単位として造墓される特徴が見られる。
3. 第5号横穴墓は、標高52mに位置し、南西に向き、床面が隅円台形でありドーム型を呈する。3体が埋葬され、副葬品の有無は不明。7C前半の築造と推定する。
4. 第15号横穴墓は、標高55mに位置し、南西に向き、床面が台形でありアーチ型を呈する。2体が埋葬され、副葬品として須恵器平瓶1、杯蓋3、杯身3点及び刀子1点を検出する。また、木質の付着した釘51本が検出された。7C中頃の築造と推定される。
5. 第14号横穴墓は、標高55mに位置し、南々西に向き、床面が隅円台形でありドーム型を呈する。当横穴墓群では大型で、14体が埋葬される。副葬品はないが、木質が板状出土し、また、木質が付着する釘73本が検出された。7C前半の築造と推定される。
6. 第16号横穴墓は、標高68mに位置し、南西に向き、床面が台形でありアーチ型を呈する。第17号墓と前庭部を共有する。4体が埋葬され、副葬品として須恵器平瓶1点が検出された。7C中頃の築造と推定される。
7. 第17号横穴墓は、標高67mに位置し、西南西に向き、床面が長台形であり縦長型を呈する。3体が埋葬され、歯骨1体分を出土する。副葬品として刀子1点が検出された。7C後半の築造と推定される。
8. 第2次調査で新たに確認された第18号・19号・20号・21号横穴墓の4基と第1次調査で確認された第6号・7号・8号・9号・10号・11号・12号横穴墓の7基の計11基は、原状を保持し、盜掘・擾乱を受けておらず良好な遺存状況を示しており、県下に現存する横穴墓群の中でも、極めて保存状況が良いと考えられる。
9. 小矢部川左岸の小矢部から高岡に至る西部・二上丘陵一帯には、後期古墳群と横穴墓群が近接して発見される。それらは、成立時期や被葬者の関連を考察する糸口であり、古墳・墓の変遷の背景をなす社会の性格とその変化を反映していると考えられる。

（酒井・大野・逸見）

写 真 ・ 図 版

図版1 頭川地区航空写真



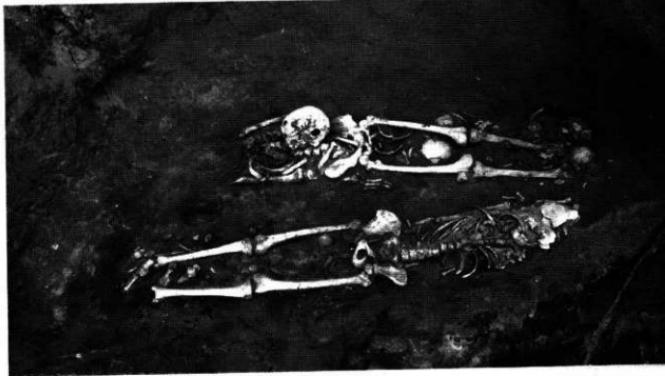
遺跡全景
(西南より)



遺跡全景
(東南より)



5号墓 (東南より)





5号墓（西南より）



14号墓（東南より）



14号墓玄室内（西北より）

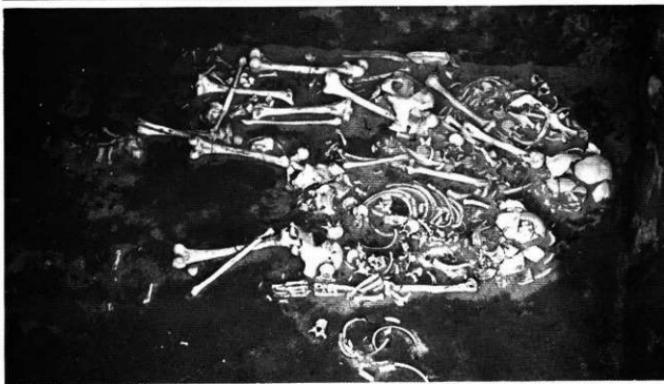
14号墓玄室内



15号墓(西北より)



15号墓玄室内(西南より)





15号墓（西南より）

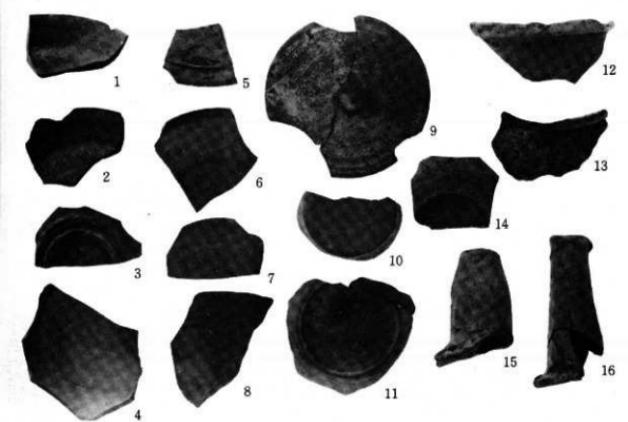
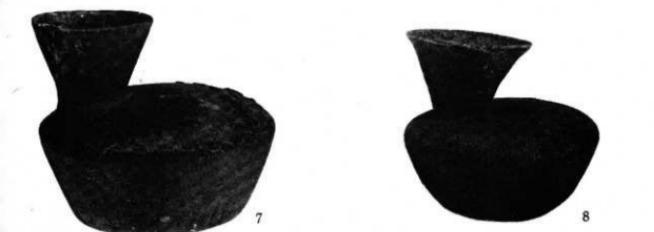
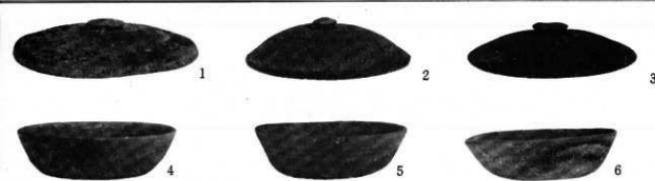


左・ 17号墓奥門部
右・ 16号・ 17号墓前庭部



17号墓（西南より）



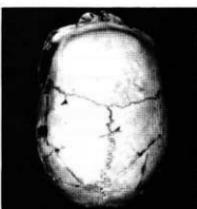




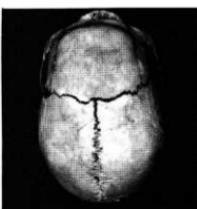
5号-A



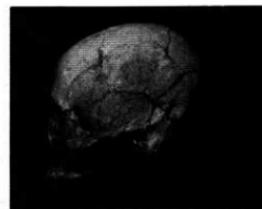
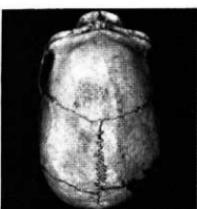
5号-C



14号-301



14号-400

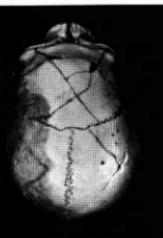


14号-731

(1 : 4)



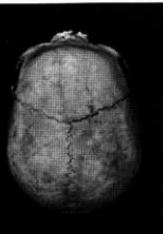
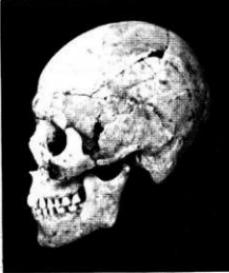
14号-1810



14号-2000



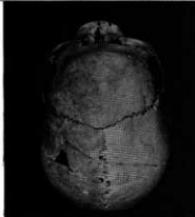
15号-B



16号-111



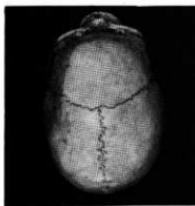
(1:4)



16号-112



16号-179



16号-230



17号-219



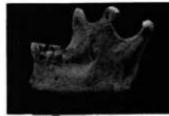
5号-B



14号-178



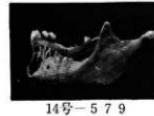
14号-1078



14号-209



14号-1811



14号-579

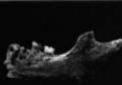


14号-481



14号-95

(1 : 4)



14号-B-1934



14号-B-56



14号-B-1700



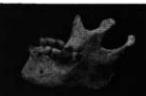
14号-B-1043



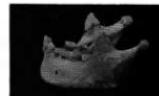
15号-B



16号-B-125



16号-B-465



16号-B-205



16号-B-238



17号-B-186



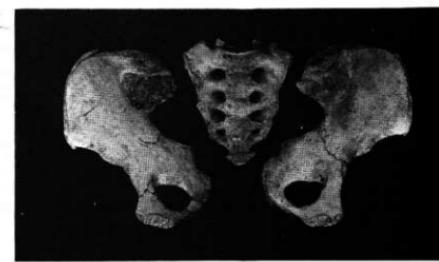
17号-B-218



17号-B-261



5号-B 右上肢帶



5号-B 骨盤



5号-B 左右自由下肢骨

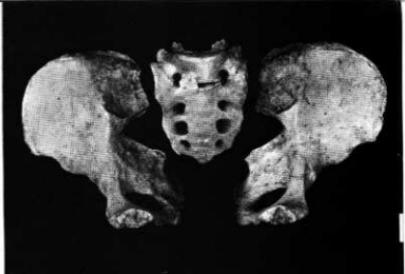


5号-B 右自由上肢骨

(1 : 4)



15号-A 左右自由上肢骨



15号-B 骨 盆



5号-A 右上肢带



5号-B 左右自由下肢骨



16号 左 宽 骨



16号 左 宽 骨

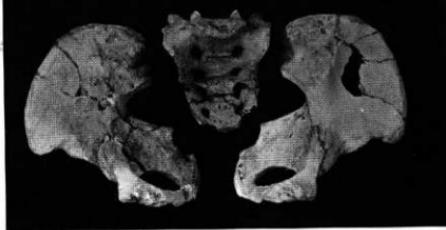


16号 左上肢骨 (1:4)





5号-A 左右自由上肢骨



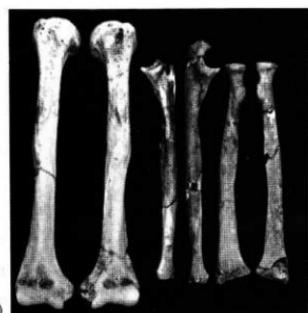
5号-B 骨盤



15号-B 左右自由下肢骨



15号-B 右上肢带



(1:4)

15号-B 左右自由上肢骨



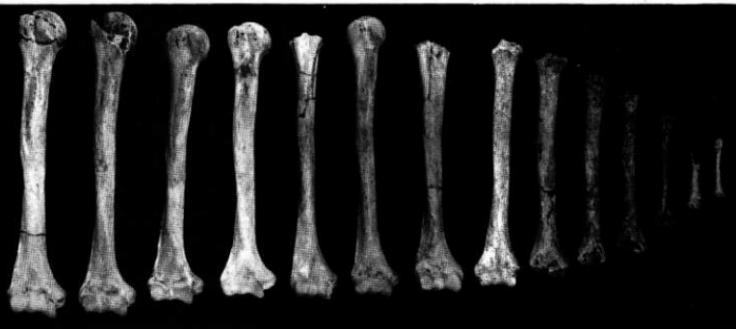
15号-B 骨盤

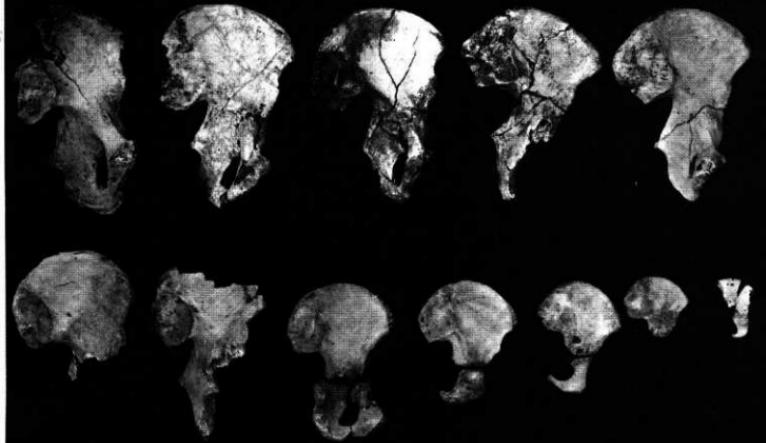


上・中 14号左大腿骨

下 14号右上腕骨

(1:4)

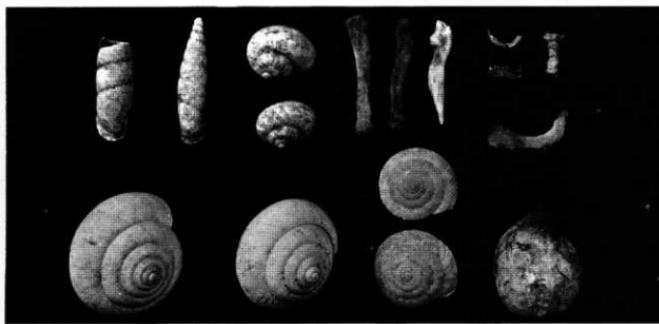




14号 左寬骨 (1 : 4)



橫穴墓群出土獸骨 (1 : 2)



橫穴墓群出土自然物等 (1 : 1)

富山県高岡市

頭川城ヶ平横穴墓群

第Ⅱ次発掘調査報告

発行日 昭和59年3月31日

発行者 高岡市教育委員会

編集者 富山県埋蔵文化財

センター

高岡市教育委員会

印刷者 (株) 日康堂